２　生徒編②

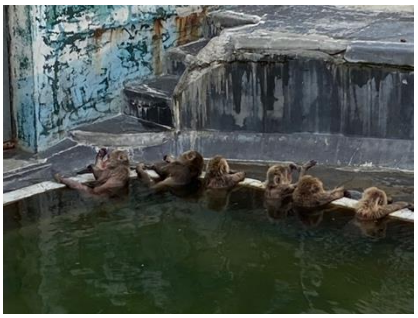
～パートナー受入～

交換留学を終えて

北海道札幌月寒高等学校　３年

［日本の受け入れ］

カナダの学校を体験したからこそ、新学期ということもあり、またクラスの仲がよくない状態で、あまりにも違う日本の学校でパートナーが退屈しないかとても心配でしたが、私のクラス含め学校はとても暖かく迎え入れてくれて、パートナーも楽しそうでした。情報の授業の時パートナーが私に向かって「なんでパソコンの授業なんかやるのかい」と質問してきました。カナダでは自分がやりたい四つのことを一年間学ぶので、このように英国数理社に加えて情報までやるのが不思議だったようです。確かにこんなのを学んで何の意味があるのだろうとか、受験で使わないのにな、と密かに思う部分もありますが、改めて考えてみると日常では触れることない機会を、学校を通して設けてくれているのかなとパートナーの言葉で日本の高校での学びの広さ、日本のいいところを見つけることができました。



［受け入れで苦労したこと］

パートナーの日本語力が想像よりも低く、受け入れして一週間は授業での先生の話を翻訳してあげなければならなかったのに苦労しました。しかしパソコンを利用した翻訳機や、事前に言いたいことをメモしておいてくれたりと、先生方がいろんな工夫をしてくれたおかげで徐々に私の出番は少なくなりました。

［家族にもたらした効果］

私の家庭はもともと外国人（父）が住んでいるので、英語が飛び交うことには何の抵抗もありませんでしたが、この家庭だからこそ触れる機会が少なかった日本文化に触れる機会が多くなり、家族も知らなかった日本のことを学ぶ良い経験になりました。

［本事業全体に係る感想や課題］

留学ではあまり同じ国籍の人と関わらないほうがいいと言いますが、本事業を通して一人ぐらいいてもいいのではないかと感じました。私は異性パートナーでしかも同じ高校に通うこの事業参加の高校生がいなかったので、すごく心細く感じることが多かったです。同じ高校に通う生徒を均等にしてくれるとありがたかったです。また、パートナーの日本語の実力には驚かされましたが、ある程度の会話ができる実力はあったほうがいいのではないかと感じました。せっかく日本語を勉強しに留学に来たのに、受け入れる私たちが英語を使わないと会話が成り立たないことが多々ありました。

しかしこの留学、受け入れを通して、たくさん学び本当に貴重な体験をさせていただけました。カナダという国を直接経験できたことはインターネットなどで知り得た情報を超える言葉で言い表せないものでした。

このプログラムを再開してくれた北海道教育庁の皆様、引率の先生、ホストファミリー、同じプログラムに参加した北海道の仲間たち、パートナーを暖かく迎え、サポートしてくれた月寒高校の先生方、生徒たち、そしてこのプログラムの参加を実現してくれたお母さん、お父さん、本当にありがとうございました。

パートナーの受け入れ

北海道札幌啓成高等学校　２年

・受け入れに際して、留意したこと・苦労したこと

私が、パートナー受け入れに際して最も注意したことは相手を尊重することでした。相手のことを考え尊重することはどの場面においても重要なことだと考えています。そのため、パートナーが日本で経験したいことや、訪れたい場所などにはできるだけ時間を確保し連れていってあげれるように努力しました。

苦労したことは、生活習慣や食生活の違いです。あと、自分の勉強時間の確保があまりできず、学習面では不安を感じながら一か月生活することになってしまいました。

・家庭にもたらした効果

パートナーの両親はネパール出身のためカナダだけではなくネパールに対する理解も深まりました。

・感想・課題

本事業を通じ、音楽は世界共通で愛されているということを強くかんじました。音楽で共通の話題をもつことで多くの人と交友関係を深めることができました。

札幌近辺の留学メンバーと集まった時に受け入れ学校によって対応が大きく異なるということがわかりました。なので、学校間で統一した受け入れ方法の基準が必要だと感じました。

エドウィンと過ごした１か月

北海道札幌手稲高等学校　３年

楽しかった思い出と苦労したこと

　私のパートナの名前はエドウィンというのですが、彼との１番の思い出は一緒に東京旅行に行ったことです。日本の有名な建築物や観光スポットを一緒に巡ったり、おしゃれなカフェで一休みしたりなどしたことは、忘れられない思い出です。

　しかし、受け入れ期間中に一回だけ喧嘩をしました。今となってはいい思い出話ですが、その時の私は一杯一杯で少し神経質だったような気がします。きちんと仲直りできて逆に仲が深まったので良かったのかな？とも思ったり。喧嘩することは悪いことではなく、落とし所を見つけて双方きちんと納得できる形で仲直りすることが大事だと感じました。

文化の違いについて

　わかっていたことなのですが実際に暮らしてみると結構文化が違ったりするなぁと感じる機会が多かったです。こんな貴重な体験をすることは滅多にないのでいい経験になったと思います。

感想と後輩たちに

　全てが終わって楽しかったなと感じることができて、カナダの友達もたくさんできて、これ以上ない素晴らしい経験ができたのではないかと思います。今こうして感想を書いている途中でもあれやこれやといろんな思い出が溢れてきて、応募した時の俺よくやったと褒めてあげたいです。

　少しだけ先輩面をさせていただくと、これを読んでいるそこの君「やらない後悔よりやる後悔」だと私は思います。見えない先のことを怖がって挑戦することを諦めることは少々つまらないことだとこの留学体験を通して感じました。後悔するならやってからしたほうがお得じゃない？と思います。

最後に

　この事業に携わってくださった関係者の皆様と私の両親に感謝を伝えたいと思います。皆様のおかげで素晴らしい経験をすることができました。ありがとうございました。

留学報告書

北海道札幌白石高等学校　２年

　ついにカナダからの留学生たちが来る日になり、新千歳空港で他の受け入れ家族と一緒にドキドキしながら待っていました。すると、カナダからの留学生たちが東京から乗ってくるはずだった飛行機に乗ることができなかったと何人かがパートナーから連絡を受けて、今日来るのかどうかわからない状態が続きました。全員、一刻も早く自分のパートナーに会いたくて待ち切れないという様子だった。今日来ると決まったときはみんなでとても喜びました。

・日本での生活

　ジョシュアは日本語が上手で、ゆっくり話すなどすると言いたいことをだいたい理解してくれました。伝わらなくて困ることはあまりなかったように感じます。それでも分からなかったときは英語を使ったり、ジェスチャーで表現したりしました。週末は外食へ行ったり、ジョシュアを連れて友達とカラオケに行ったりしました。北海道神宮へも行きました。幸運なことにちょうど桜のシーズンだったのでジョシュアが見たいと言っていた桜を見せてあげることができました。さらに歴史に興味があると言っていたので開拓の村へ行きました。気に入ったようで、閉館時間ギリギリまで展示をじっくり見ていました。家では自分の部屋に籠もってしまうということがなかったので、家族でゲームをしたり日本語の勉強をしたりして仲良くなることができました。ジョシュアは自分の疑問やしたくないことなどをはっきり言ってくれたのでお互い我慢することが少なく、とても楽しい一ヶ月を過ごすことができました。少し大変だったことは、一人で街へ出かけようとしていたのを説得してやめさせることでした。危ないし、迷子になる可能性があるから私も付いて行くよと言っても一人で行きたいの一点張りでした。なんとか説得できましたが、文化の違いを感じました。私は少しお節介すぎたかなと思いました。そしてあっという間に一ヶ月が経ち、留学最終日には「楽しかった。また日本に来たい。」と言ってくれました。とても嬉しかったです。

・学校での生活

　学校では、たくさんの先生方やクラスメートが協力してくれたおかげで楽しく過ごせていたと思います。白石高校には英語クラブがあるので、ジョシュアの歓迎会を開きました。ジョシュアは英語クラブが気に入ったようで、放課後英語クラブに遊びに行くこともありました。みんなでトランプをしたり、映画を見たりしました。学校の授業数がカナダより多いので、少しでも負担を減らすために自習時間や休憩時間などを組み入れたりしたけれど、放課後はかなり疲れている様子でした。学校では一人で静かに過ごしていることが多かったです。

・最後に

　この留学を通して、英語力向上はもちろん、文化の違いや考え方の違いを知ることができました。また、日本の文化についても改めてじっくり考えることができました。初めての海外で、たくさん困ったことはありましたが、色々な経験をしたり、ホストファミリーやカナダの人たちに出会うことができて本当によかったと思います。この留学で学んだことは忘れずに、将来に向けて努力を続けていきたいと思います。この留学をサポートしてくださった方々、本当にありがとうございました。

私を変えた交換留学

北海道札幌国際情報高校　３年

1.応募のきっかけ

私は中学生の時にアメリカから留学生をホームステイという形で受け入れたことがあり、その留学生が日本語はもちろん日本の文化や習慣を楽しみながら学んでいる姿を間近で見ていて、次は自分も留学に挑戦してみたいと思いました。いつか留学したいとは思っていましたがなかなか１歩を踏み出せずにいた中、このプログラムが学校で紹介されたときに自分が留学するだけではなく留学生の受け入れもできるので 2 回も英語力を鍛えるチャンスがあると感じ、思い切って応募しました。面接をして数週間後、担当の先生から合格通知とパートナーの情報が書かれた書類をもらった時は嬉しさでいっぱいでした。その書類を読んでいくとパートナーのが住んでいる都市がエドモントンだと分かりました。私の担任の先生は昔エドモントンに住んでいたことがあり、そこでの生活についての話をよく聞いていました。その話を聞いてカナダに魅力を感じたこともこのプログラムに応募した１つの理由です。そのため、実際にその場所で 1 ヶ月間生活できるということも嬉しかったです。

2.カナダでの生活

2 月、いよいよカナダへ出発する日がやってきました。ドキドキしながら空港へ向かい、空港に着いて初めて一緒に留学に行く仲間たち 10 人と対面で会うことができました。（それまでは ZOOM などオンラインでの合流のみでした）札幌からエドモントンまでは約 25 時間かかりましたが、その移動時間 を通して仲間たちとは飛行機の中で英会話の勉強をしたりして仲を深められました。

バンクーバーからエドモントンへ向かう飛行機の中ではパートナーの Ellia にやっと会えるという喜びと緊張が入り混じっていました。エドモントン空港に着くと Ellia とその家族が温かく迎え入れてくれてとても安心しました。空港から Ellia の家に向かうとき、道路や建物の敷地 1 つ 1 つがとても大きくて びっくりしました。車の窓から日本とは全く違う景色を見て「本当にカナダに来たんだ」とはっきり実感しました。

到着から 2 日経つといよいよカナダでの学校生活が始まりました。私が通った Harry Ainlay 高校は 全校生徒が 3000 人を超えていて校舎がとても広く、どの廊下を歩いてもたくさんの生徒がいました。私は ESL（英語）、社会、音楽、リーダーシップという 4 つの受けました。日本にはない環境や授業形 式で勉強するのはすごく刺激的でした。カナダの学校は日本に比べてグループワークを中心とする授業形式でした。私が受けた 4 つの授業の中で、特にリーダーシップの授業は受ける前どのようなことを学ぶのか全く想想像がつきませんでした。実際に受けてみると学校内のボランティア活動をしたり「Remember The Titans」という映画を見てより良いリーダーになる研究をしたりと毎回楽しかったです。なので私の一番お気に入りの授業になりました。どの授業に行っても必ず私に話しかけて手助けをしてくれて人がいてカナダ人のフレンドリーさを感じました。

また、この高校には日本人との交流会を企画・運営する「Tomodachikai club」というクラブがありました。このクラブの生徒たちは放課後にウェルカムパーティーやフェアウェルパーティはもちろん、バスケ大会を開いてくれたりパンケーキのお店に連れて行ってくれたりとカナダの生徒と関わる機会を作ってくれました。そのおかげでたくさん友達ができました。みんな日本が大好きで、日本の音楽を聴いたり漫画を読んでいたりしていてとても嬉しかったです。日本の大学に進学すると言っていた生徒もいました。

週末はホストファミリーとバンフへスキーに行ったり、カルガリーへ旅行したりなどエドモントン市 外にもたくさんの場所に連れて行ってくれました。その中でカナダのグルメや自然を満喫することができました。カナダには世界各国からの移民が住んでいるので様々な国のレストランがあり、カナダ以外にもいろいろな国の郷土料理を食べることができました。どれもとても美味しかったです。そして、カナダの自然はバンフの山はカナディアンロッキーということもあり迫力があってとても綺麗でした。また、日本に帰る前日にたまたま夜の空を見ていたらオーロラを見ることもできました。綺麗さはもちろん、最後の最後に本当に素敵な景色を見ることができてとても感動しました。カナダの大自然の中文化にもたくさん触れることができて貴重な体験をさせてもらいました。

このように、平日も休日も優しいカナディアンに囲まれて楽しく充実した時間を送ることができました。

3.日本での Ellia との生活

帰国して約３週間後、次は私がホストファミリーになる番になりました。日本を楽しんでもらえるかどうか、日本の生活の中で不安を抱えさせてしまわないか心配でしたが私がカナダにいたときのホストファミリーのように家族で話す機会を作り、その中でコミュニケーションをとって不安を取り除けるようにしていました。

学校生活については、最初はカナダと日本の学校生活は全然違うので慣れないこともあったと思いますが、先生やクラスメイトとできる限りサポートしました。初めての登校日から数日経ってクラスでウェルカムパーティーをし、日本のお菓子を１人１個プレゼントするという企画をしたのですが、とても喜んでくれました。授業は１日の半分ほどは私のクラスに来て一緒に勉強していました。もう半分は Ellia が来ていた時期には他にも留学生が何人か来ていたのでその留学生達と一緒に書道や日本文化の授業を受け、日本の文化に触れていたようです。

Ellia の日本滞在期間はちょうどゴールデンウィークにかかっていたので、ゴールデンウィークに入る と函館に行って見頃の桜を見たり、エドモントンなどカナダ内陸ではなかなか見られない海を小樽に行 って見てきたりしました。Ellia は桜や海のきれいさにとても感動していました。

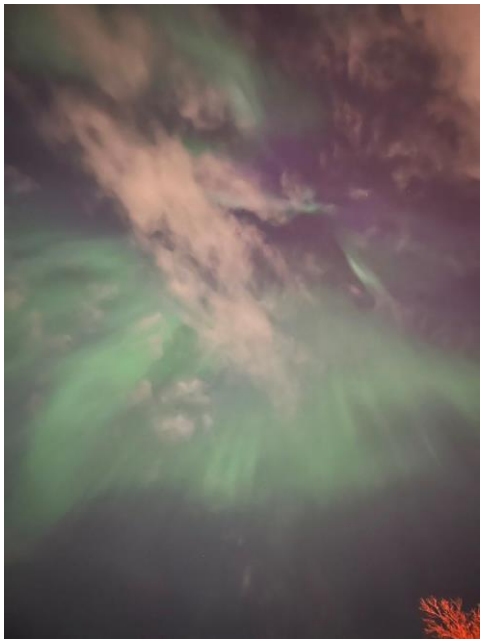
時期が 3 年生の 4 月から 5 月にかけてだったということもあり、部活や受験勉強をしなければいけませんでした。それにより当初思っていたよりも Ellia との時間を取れず悔しい思いをしたので、受け入れ前から自分の状況に合わせてホームステイの計画をしておくべきでした。でも、Ellia には最大限日本 の魅力を伝えたのでまた日本に来るきっかけにな

ると嬉しいです。

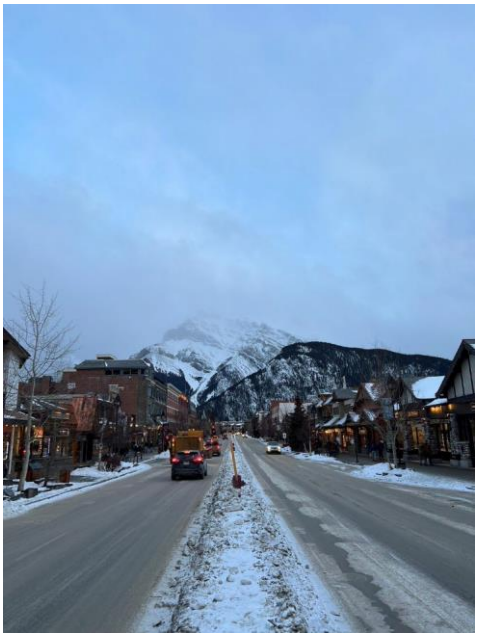
4.この交換留学を通して

　この留学を通して、まず一番に積極的に行動できるようになったと思います。それは、留学中に伝わるかどうか分からないこともまずは積極的に伝えてみることを意識したからだと思います。それによって人との距離が縮められていろいろな人と仲良くなることができました。最初は正直自分の英語が伝わるかどうか、授業についていけるかどうか、友達ができるかなど不安なことも多かったです。ですがカナダでの留学中にはパートナー一家をはじめ、優しい友達や先生にも恵まれて毎日楽しいカナダ生活を送れました。授業も日を重ねて慣れていくとだんだん理解できるようになりました。日本に帰って来て受け入れが始まってからも、クラスメイトや先生が一丸となって Ellia に日本で楽しい思い出を作ってもらおうと行動してくれました。このように、私だけでなくこの留学に関わっている皆様のおかげでこの交換留学を成功させることができました。この感謝の気持ちを忘れずに、私は将来英語を使った仕事をしたいと考えているので留学での経験を存分に生かしていきたいです。このような何にも変え難い貴重な経験をさせていただきサポートしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

　帰国前夜、オーロラを見ることができました。



パンフの街並みとカナディアンロッキー



Lily と過ごした２ヶ月間

北海道千歳高等学校　２年

【受入に関して】

カナダで 1 ヶ月一緒に過ごしたリリーと再会できることはとても楽しみでした。新千歳空港への到着が予定より２時間ほど遅れ、夜 10 時くらいまで待つことになり、やっと会えたときはとても嬉しかったです。

母がカナダに留学していたこともあって、応援してくれたので参加を決めたプログラムでしたが、リリーが来て、最初はなかなか何が好きなのかわからなかったことが苦労しました。色々な場所に一緒に行きましたが、反応が薄かったので、本屋さんやゲオでゲームを見たとき、やっと嬉しそうな顔を見せてくれて、とても嬉しかったです。母は、Google 翻訳を使いながら会話をし、毎日の献立や、休日の予定などを考えました。

【家庭にもたらした効果と課題】

私には兄弟や姉妹がいないので、カナダでの 1 ヶ月に加えて自分の家に 1 ヶ月リリーが来てくれて、嬉しかったです。温泉で一緒に浴衣を着たり、海に行ったり楽しい思い出がたくさんできました。

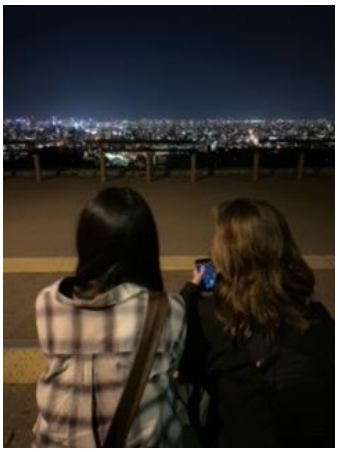
学校では、茶道部や、私の部活であるサッカー部に参加してもらい、行動を共にしていました。授業では英作文を書いてくれたり、勉強の面でもとても刺激になりました。最後の全校生徒への挨拶では、また日本に来たいと言っていたので、日本での体験を楽しんでくれたのだと思います。

課題と感じたのは、英語で言いたいことをうまく伝えられないことでした。もっとたくさん話すことができたら、リリーももっと楽しく過ごせたのでなないかと思いました。

【最後に】

今回のこの交換留学プログラムでは色々な経験をすることができ、たくさんの方たちに会えました。自分の世界が広がり、英語力も伸びたと感じています。この経験は将来の助けになると思います。今後も英語の勉強に力を入れて、より広い世界を知りたいです。

プログラムに関わっていただいた関係者の皆様、１ヶ月間私を受け入れてくれたホストファミリー、優しく接してくれた Harry Ainlay 高校の先生方、たくさんの方達のおかげでとても良い経験ができました。本当にありがとうございました。



報告書

北海道北広島高等学校　３年

受け入れに関して苦労・留意したこと

　英語を話せる人が周りに少ないため、誰かがパートナーと話すときにほぼ私が通訳をする必要があり大変だった。また授業は基本的に私と一緒に受けていたため、英語以外の授業は解説をするのに苦労した。毎日朝から夜まで英語を使い続けて疲れていても、簡単に１ 人の時間を作ることができなかった。私は基本大人数で行動しているが、その際パートナーがほったらかしにされてしまうこともあり、日本人の友達とパートナーと話すバランスも難しかった。そのようなことが理由で母親と意見がぶつかることもあった。パートナーはあまり感情を大きく出す性格ではなかったから、美味しいと言ったときも気を遣ってないか最初はわからなかった。

　パートナーはお腹が弱く体調を崩すことが度々あった。カナダでもそうらしいが、慣れない環境で余計に体調を崩しやすいと思い、母と私でしばしば体調をうかがった。食べ物の好き嫌いがある性格のパートナーだったので、日本の食べ物にも挑戦しながら、ハンバーガーやステーキなど慣れ親しんだものも一緒に食べるようにした。

家庭にもたらした影響

　留学生を迎えている間、文化の違いや言語の壁などによるトラブルがたくさん起こった。そのため母とたくさん話して相談するようにした。もともと母とはあまりたくさん話すことはなかったが、２ 人でたくさん悩み話し合ったから、パートナーが帰った後も話す量が増えたと思う。

　私も母もこの留学を通して、カナダだけでなく世界の国々に興味を持つようになった。そのためこれまで国内のニュースしか見てなかったが、世界中のニュースをチェックし始めた。

　私が英語をより一層勉強するようになったのは当然だが、英語を話せない母がパートナーと話したいという目標から英語を勉強し始めるようになった。わからないところを質問されたとき、わかりやすく説明しようとすると、より英語に対する理解が深まり、自分の勉強にもなっている。

感想と課題

　このような交換留学を企画してもらいありがたいと思った。

　１ ヶ月という短い期間の留学と受け入れだったが、この２ ヶ月で物の見え方や考えが非常に変わった。例えば進路では、やることも決めずになんとなく国公立を志望していた。しかし英語を話せる日本人がどれだけ貴重か、海外の人と話せる楽しさが分かり、実践的な英語を学べ、留学などにも力を入れている大学を探すようになり、そのような大学に進学したいと考えている。

　カナダ人と接していると個性をすごく感じた。カナダ人は非常に自信家で、周りの目を

気にせず自分の好きな格好をしている人が多いように感じた。日本では理解の遅れているLGBT なども個性の一つと捉えているようで、当たり前のことだが他の友人と全く変わらない対応をしていた。

自分自身がカナダに行き、またパートナーが日本に来ることで日本人とカナダ人のいいところに気づけた。カナダ人は誰に対しても紳士的で、ドアを開けてあげるなどの大人な優しさが目立っていた。それに対して日本人は相手に気づかれなくても裏で気を遣ってくれることが多かったり、パートナーの日本語が少し通じなくても頑張って意味を汲み取ろうとしてくれた。優しさの形は違うが、どちらも素晴らしいと思った。

課題としては、留学生のサポートが挙げられると思う。１つの学校に複数人留学生いる学校だと、悩みを言い合えたり意見交換がしやすいと思う。私の留学先の学校には日本人がいたから良かったが、周りに日本人がいないと精神的に辛いこともたくさんあったと思う。

留学生を受け入れて得た経験

北海道登別明日中等教育学校　５年

〈スケジュール〉

・４月 15 日（１日目）　新千歳空港でカナダ訪問以来再会
・４月 16 日（２日目）　初の札幌（抹茶体験・CD ショップ・回転ずしへ）
・４月 17 日（３日目）　初登校
・４月 22 日（８日目）　放課後に初めて学校の友達とともに外で遊びに行く
・４月 23 日（９日目）　２回目の札幌（北海道神宮で花見・留学生同士で札幌観光）
・４月 28 日（14 日目）登別温泉で一泊
・４月 30 日（16 日目）ES CON FIELD HOKKAIDO で野球観戦
・５月３日　(20 日目）　パークゴルフと温泉
・５月４日　(21 日目）　友人と三人で小樽・札幌観光（留学生同士でテレビ塔観光）
・５月５日　(22 日目）　ここから３日間函館観光（留学生同士で五稜郭などを観光）
・５月 12 日（29 日目）　最後の登校
・５月 13 日（30 日目）　お別れの見送り

〈一緒にいて楽しかったこと〉

カナダでお別れしてから１か月ほどでの再会だったので、すぐに再び仲良く話し、迎えた初日から笑顔のあふれる食卓となりました。私の留学生の場合、たいていの日本食は挑戦していて、好きな料理である時も、苦手な時も、嫌な顔ひとつせずに笑顔で食べてくれました。食卓では、「おいしいね」などと味の共感や表情を確認すると、会話がよく弾むでしょう。

また、他の留学生家族とのつながりを大切にし、留学生同士で観光を楽しんだり、電話をしたりする場面を多く設けるようにしました。留学生同士で話すときは、自分の母語である英語を多用していたので、言葉の意味で心にゆとりができるのかもしれません。私もカナダへ行った際、他に同じ高校へ行った友人と日本語で話している時は安心しました。

そして、どこかへ遊びに行く際は、２人きりのみではなく、何人かの友達とも行くように心がけました。そのようにすることで、２人きりの時とは全く異なる会話や観光となったので、より多くの会話や交流をするためにこの方法をお勧めします。

〈苦労したこと〉

私は毎日、放課後に生徒会活動があり、当初はそれが終わるまで、学校で１時間半ほど待ってもらっていました。ところが、毎日そこまで待たせていても良いのかと気をもんでいました。そこで、登校が始まって数日後に、留学生の友達が先に一人で帰っても良いかと聞いてくれて、その不安は解消しました。お互いの放課後が有意義なものとなり、この判断は成功だったと思います。常に２人でいるだけではなく、留学生が１人で日本を楽しむ時間を作ると、互いに精神面で余裕が生まれるので、これから留学生を受け入れる皆さ

んにもしていただきたいです。

　最も大きく悩んだのは、学校の授業の時でした。留学生を学校に受け入れる当初には、言語の面でどのようにして支えていくかを先生と確認しきれておらず、本人も終始困惑していました。言語の壁を超えられずに何もわからずに過ごす授業は、つまらないものになってしまうので、他の授業を選択したり、特別な対応をしたりしてもらえるよう、先生と事前に話しておくと良いでしょう。

〈留学生を受け入れたことで経験できたこと〉

　最も身近な外国人が留学生となり、彼らが日本の文化についてどのような反応を示し、何を考えているかに、直に触れることができました。私は日本のアニメや漫画の文化に非常に疎いですが、留学生たちは皆それらの文化が好きで、それを機に、私もアニメや漫画に触れる機会がやや多くなりました。なぜ外国人までも、日本の文化に魅了してくれるのか、その理由が分かった気がします。

日本での受け入れ

北海道旭川東高等学校　２年

まず日本にローレンが来る日バンクーバーから成田の便が遅れて新千歳に今日中につかないかも、ということが起こって大変でした。なんとか他の便に乗れて 10 時ぐらいに感動の再会を果たしました。私は旭川に住んでいるのでその日は家に着いたのは夜の１時ぐらいで眠るだけでした。次の日は家のルールを教えたり、通う高校まで行ったりして、ゆっくりしました。夜に手巻き寿司パーティーを企画していましたがローレンの体調が悪くてその日はほとんど何も食べれていなくて心配でした。少しずつ生活に慣れていく中で体調が良くなっていきよかったです。

初めての登校の日はとても緊張した様子でしたが、クラスのみんなが花吹雪をして温かく受け入れてくれたので緊張もほぐれ、すぐに人気者になりました。

授業は難しいものが多く理解が大変そうでしたが、科学の実験や体育、書道などの科目はとても楽しんでいました。また２年生で運動会を企画して応援合戦や綱引き、玉入れ、リレーを行い、クラスとローレンの仲もさらに深まりました。

放課後には茶道部、書道部、英語部、陸上部などいろいろな体験もできました。通学には電車と自転車を使って私としていましたが、慣れてきたら家の鍵を渡して１人で帰れるようにしました。学校の友達とはカラオケやラーメン、プリクラなど日本の高校生らしいこともたくさんできました。

学校の最後の日はアルバムを作ってあげたり、レクを企画しみんなで遊んだり、最後はカラオケに行きました。どれもすごく楽しんで、別れる時はみんな号泣していました。

　ゴールデンウィークは２泊３日の旅行をしました。特に楽しんでいた場所は伊達時代村でした。また温泉宿に泊まり、布団をひいてねる和室の部屋や温泉の文化などを気に入ってたいました。家族でさらに仲を深められました。

　私の所属している陸上部は春に大会が立て続けにあるので、大会のある日は私の親と多くの時間を過ごしていました。大会の応援にも来てくれて嬉しかったです。部活はできる限り早く終わらせるようにしたり、ローレンも体を動かすことがすきなので私と一緒に陸上部に参加して走ったりもしました。

ローレンの撮った写真を見せてもらうと日本の何気ない日常を撮っていて面白かったです。一緒に日本で生活していくなかで、たくさんの発見があってとても楽しい 1 カ月でした。この経験を活かし、これからもがんばります。この事業に参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。

交換留学を終えて

北海道釧路湖陵高等学校　２年

パートナーのアリーアを受け入れる前は、私とアリーアの部屋をカーテンで区切ったり、食器を用意したりしました。受け入れ期間中、アリーアと私は別のクラスで授業を受け、昼休みには友人と一緒にお弁当を食べたり、ウノをしたり、お話をしたりと楽しく過ごしていました。学校生活の初めの頃は少し緊張しているようでしたが、絵を描くことやゲームをすることが好きなアリーアと共通の趣味を持つ友人ができ、嬉しそうでした。毎朝 6 時半くらいに寝坊せずに起き、しっかり登校準備をしてくれたので良かったです。数学の授業などアリーアが難しいと感じた授業がある時間帯は、図書室で日本語のワークに取り組んだりしていました。また休日には摩周湖に行ったり、阿寒に旅行に行ったりとカナダとは異なる魅力を持つ北海道の自然に触れることができました。家では、食事中に家族とコミュニケーションを取ることが多かったです。主に英語でコミュニケーションを取っていました。アリーアに家族のことやカナダのことを聞くと丁寧に答えてくれて、とても楽しかったです。一度、食事終わりに家族とアリーアでカルタをすると、アリーアが思った以上に強くて驚きました。アリーアと日本で過ごした一か月間は、とても楽しく充実した時間になったと思います。また、アリーアがカナダに帰国した後はとても寂しかったです。しかし、アリーアと私の家族が一緒に一か月間を過ごした後、家族とコミュニケーションを取る機会がさらに増したように感じました。

【全体を通しての感想】

私はこの時期に留学に行くことができて良かったと思います。一か月間という長い期間留学に行くことで自分自身の学習に支障が出るのではないかと心配でしたが、特に大きな問題はなく、学校生活に復帰できてよかったです。また、留学の準備期間でわからないことや心配なことがあれば、同じ留学生同士のグループ LINE やクラスルームを活用し、解決することができたのでとても安心感がありました。そして、この二か月間で特に大きな問題もなく、無事に留学を楽しく終えることができて本当に良かったです。最初は留学に応募するかとても悩んだけれど、留学に行くことでしか体験できない貴重な経験を通し、コミュケーション能力や英語力など様々な力を向上させることができてよかったです。この二か月間で培った自信や力を今後に繋げていけるように頑張りたいです。

３　保護者編

令和４年度（2022年度）北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道札幌月寒高等学校　保護者

[受け入れ]

我が家は父親が米国人で、男、女、男の順で子どもがいる国際結婚ファミリーです。母親である私も海外在住経験があり、仕事でも英語を使用しております。そんな「異文化の方と接する機会が多く、英語に不自由がなく、男女どちらの子育ての経験がある」私でも、ホストファミリー生活はなかなか大変な日々でした。

受け入れ前もただ不安に過ごしていたのではなく、事前にカナダのお母さんと何度もメッセージをやりとりして細かく尋ねました。しかし毎回「心配ないわよ、大丈夫よ、うちの息子は適応力があるから」といった具合で少しも助けになりませんでした。大陸国のおおらかさというか、女の子を育てた経験がないのに我が家の娘を預かることにもどっしり構えていらして、今思えばそれぐらいでちょうどよかったのですが、もどかしさはありました。

受け入れでいちばん心がけたのは、先に娘がカナダで生活させてもらったので、あちらでしていただいたことはなるべく返すということでした。しかし、あちらでは通学は車で２０分、こちらはバス・地下鉄・徒歩で１時間。平日は両親ともに５時に帰宅し、テレビをつけない家庭だそうで、夕食を済ませると就寝まで一緒にゲームをしたり映画を見たり、家族との交流がたくさんあったようでした。一方私たちは早くても帰宅は６時すぎ。父親は９時まで帰宅できない日もあり、一緒に夕飯をとるのは週末だけでしたし、留学生本人も部活に参加し、毎日７時半頃に帰宅していたので、平日は留学生と交流する時間がなかなか確保できませんでした。

そのせいか、最後まで遠慮がぬけず、意思表示をしてもらえなかったので、それがいちばん苦労というか、ホストマザーとしてつらかったことでした。彼は礼儀正しく、穏やかで、とてもいい子でした。なんでも食べてくれたし、どこにでも一緒に行きましたが、一緒に生活しているのに、相手が何を好み、何をすれば喜ぶのか、まったく気持ちがわからないというのは予想していなかったストレスでした。滞在がもう少し長ければ、打ち解けてもらえたかもしれませが、異文化交流以前に他人の子どもを預かるというのは簡単なことではありませんね。

[留学によるわが子の成長]

娘の留学の目的は、英語力の向上ではなく、「ハーフ」という個性をもつおかげでいい意味でも悪い意味でも注目される日本の環境とは違い、多様な人種が存在する国で、注目されず、自分らしく生きる経験をすること、と我が家ではとらえておりました。

この点については、彼女が帰国した日のことが忘れられません。目の輝きも話すときの表情もまるで別人だったからです。帰国からしばらくたった現在も、その目の輝きは失っておらず、自分の将来へのビジョンを持ち、志望校を決め、以前より自信にあふれているように見えます。日本にいると周りと同じことに安心感を覚えがちですが、周りと違うことに対しての恐怖感がなくなり、自分らしく生きていく覚悟が生まれたように思います。

また、親としては、カナダの文化に触れたこと以上に、カナダで中国や東南アジアにルーツをもつ子たちと仲良くなったことを嬉しく思います。英語が好き、英語を使って将来仕事がしたいという子は西洋文化に憧れたり好む傾向があると思いますが、近隣の国々の文化についても理解することは大事なことです。いろんな国にひとりずつ友達がいれば戦争は起きない、という言葉がありますが、日本で暮らしているとなかなかいろいろな人種・文化の方と交流できないので、高校生のうちにカナダでそれが経験できてよかったなと思います。

また、通った高校が、街の中心のショッピングモールのすぐそばで全校生徒3000人という大きな学校であったことも、全員と交流はできなくても、同じ場に様々な人種がいて、それぞれの背景、価値観があり、そんな集団の中で努力して協調して生きていくことの大切さを実感できたと思います。

当初はたった１か月でお友達を作るのは大変だろうなと思っておりましたが、毎日お友達と昼食を一緒にとり、おうちに遊びに行ったりもでき、娘は家族と過ごしたことよりも高校生活が楽しかった、またカナダの高校に通いたいと言っていました。子どもにとっては同世代との交流がいちばん心に残るようです。我が家で受け入れた留学生も、クラスの子たちはもちろん学年全体で歓迎してくれたおかげで、いろんな部活にも参加させてもらい、高校生活を楽しく送っていたので、ホストファミリーとしてもっと心の交流ができなくて悪かった、という罪悪感が少し和らぎました。この報告の最初から、ホストファミリー生活は大変だったと書いて、これから受け入れようとする方に不安を与えてしまったかもしれませんが、最終的に「ホストファミリーとしてそんなに気負わなくても、留学生は学校で貴重な経験をしていい思い出を作って帰国するから大丈夫。」ということをお伝えしたかったのでした。

たった１か月のカナダ生活でしたが、娘の人生に実りを与える種をたくさんまいてもらいましたし、家族もホストファミリーになるという貴重な経験もできました。これからそれをどんなふうに育て、花を咲かせることができるかどうかは本人の努力次第ですが、きっと娘は恩を返せると思います。ありがとうございました。

研修報告書

北海道札幌啓成高等学校　保護者

受入に際して留意したこと、苦労したこと

我が家で受入れましたエドモントンから留学生 Ayusha さんは大変陽気でコミュニケーション能力が高い生徒だったため受入に際して特に苦労したことは特にありませんでした。事前に数回 Ayusha さんのご両親とオンラインで面談し情報交換を行い受け入れの準備をしました。

受入に関し特に留意したのは留学生自身の意思とプライバシーの尊重でした。文化や社会背景が異なる学生を受け入れる際にはこれらの尊重を最重要ととらえ留学生の自主性を尊重し生徒自身が希望することについてそれが可能になるようにサポートすることに努めました。また日本や北海道の自然や文化を紹介するため、家族での小樽や積丹半島への日帰り旅行、函館および伊達時代村への宿泊を含む旅行を行いました。

言語面では我が家では妻が外国籍なため、家庭内では日常英語を含めた３言語を使っており留学生とのコミュニケーションは問題なく英語で行うことができました。

日常生活面においては「学校に行く」そして「門限を守る」以外には特に決まりを作らず、それで特に問題はありませんでした。

本事業が家庭・学校・地域にもたらした効果について

Ayusha さんの滞在によって最近のカナダの若者の行動や考え方を知ることができました。　また Ayusha さんはカナダ移民２世代目のため移民１世代目ご両親よりご両親の母国の文化や言語の教育を受けておりご両親の出身国（ネパール）の文化などについても興味深い話を聞くことができました。

娘にとっては今回の受入は同世代の外国籍生徒と交流ができ大変楽しかったようです。Ayusha さんと共に高校の友達や中学時代の友達と夕食会やカラオケなどを行いました。これらの活動は Ayusha さんと関わった生徒の国際性涵養に大きく寄与したと思います。

本事業全体に係る感想や、課題と感じること

- 全体的に本事業は大変良い取り組みだと思いました。道として積極的に新しいパートナーを開拓しより多くの生徒にこのような機会を与えるべきだと思いました。
- 本事業は保護者にとって経済的な負担が大きいと感じました。国で行っている Tobitate 留学 JAPAN などと連携し保護者の経済的負担を軽減することでより多くの生徒が同様な事業の恩恵を受けることができると思います。
- 各高校の留学生受入体制に大きな差を感じました。道教育委員会で最低限の基準を設け均一化を図るべきだと思います。　（娘が通う札幌啓成高校では最初の日に、全校放送で Ayusha さんが自己紹介をし、その後１年生から３年生までの多くの生徒が Ayusha さんと交流を試みたそうです。また担当の先生からは週１回お電話をいただき、情報交換を行いました。）
- 北海道にきた留学生が集まり意見交換を機会があってもよいと思います。
- 来道した留学生に北海道大学で行っている英語学部プログラムなどを紹介し、北海道への長期留学を促すべきだと思いました。

研修報告書

北海道札幌手稲高等学校　保護者

約１ヶ月間の交換留学生の受け入れは、あっという間でした。日本とカナダでパートナーとなった二人の高校生たちと、良い時を過ごしました。

日常生活

アルバータ州からの留学生には、我が家の日常に入ってもらうような感覚で迎えました。起床から朝食、夕食、就寝まで、生活リズムもそのままに１ヶ月を過ごしました。食事も我が家の普段の食事をしていましたが、留学生の無理にならないようには気をつけました。しかし、そのような心配をせずとも、パートナーは我が家の生活に、見事に、すぐに溶け込んでいました。

我が家のコミュニケーション

パートナーは日本語も学んでいたので、英語と日本語をとり混ぜて会話しました。家の中では次第にそれが通常のやりとりになりました。小学生の子どももゲームの話を、伝わるか伝わらないかを気にすることもなく、日本語で語っていました。コミュニケーションが、言語によるものだけではないことを、お互いに感じ、楽しむことができたのではないかと思います。

得たこと

この事業を通して、子どもは確実に、異なる社会に触れ、異なる視点を得ることができたと思います。また、自分は何を大切にし、どうありたいかを考える時間になっていたのではないでしょうか。私たち家族も、カナダからの高校生とともに暮らす体験を通して、他国の人々の高校時代の過ごし方を垣間見ることができ、わずかながら世界が広がりました。

杞憂

日本の留学生は、カナダの高校で一定の選択肢の中から興味をもった教科を選択して、比較的自由に学ぶことができ、学習面で得られたことも多かったようです。一方、カナダの留学生は、同じように日本の学校生活を楽しんでいるだろうか、言語的な壁を感じることが多いではないか、と案じました。しかし、それも杞憂でした。最終日に空港で、交換留学生たちが笑い合い、別れを惜しむ姿を見ると、彼らにとっては、すべてがかけがえのない体験だったのでしょう。

さいごに

二人の若者たちにとって、この経験が遠い将来、何かの糧となることがあれば幸いです。道やアルバータ州の関係者の皆様、高校の先生方に心より感謝申し上げます

報告書

北海道札幌白石高等学校　保護者

今回このプログラムに参加するにあたり、初めての事で何から準備すればよいのか全く分からず、色々調べる所からのスタートでした。
教育委員会からの書類やポータルサイトを参考にしながら準備しました。

渡航準備は本当にたくさんの書類の準備が必要で、正直大変でした。
パスポート申請やデビットカード・クレジットカードなど時間のかかるものは早めの準備をすべきでした。
事前にパートナーのお母さんとメールで連絡を取り合い、準備したらよいものなどを確認しましたが、翻訳アプリで訳した英文ではなかなか伝わらず困ることもありましたが相手のお母さんがとても優しい方で、足りないものがあればカナダで調達すればよいから心配せずに送り出して。と言ってくださったので安心して送り出す事が出来ました。渡航 1 週間前ぐらいに Zoom で家族同士顔合わせをしました。

向こうはとても寒いとの事だったので、温かい服をたくさん準備しましたがあまり必要なかったようです。日本の冬と同じ感覚で大丈夫だと思いました。
心配であれこれ持たせましたが、使わないものがほとんどで、必要に応じて現地調達が一番良かったかもしれません。
持っていって良かったと思ったものは、頭痛薬と生理用品とビニール袋です。

渡航後は２～３日は時差ぼけで昼夜逆転し、疲れているのに眠れず大変そうでした。
体調がよくないと気持ちも落ち込み、ホームシックのような感じになってしまったようです。その時はまめに LINE や電話をして話をしました。
数日して体調も戻り、カナダの学校へ登校も始まった頃にはあまり連絡も来なくなったので安心しました。

カナダの生活で１番心配だった事は食事でした。
パートナーは朝食もあまり食べず、昼食も持っていかない子だったので朝食の準備なく、昼食も持たせてもらえませんでした。
登校の時間にパートナーのお母さんはまだ起きていないとの事だったので頼むこともできず、結局最後までなかったです。なので、学校が終わってからどこかで食べるか、コンビニに行くことが多かったようです。

カナダはあまり洗濯を頻繁にしないと聞いていましたが、パートナーの家は自分でするというルールのようで、好きなタイミングで自分で洗濯できたので気を使うこともなく、とても良かったようです。お風呂・シャワーも同様に自由に使用できたそうです。

娘のためにと、週末ごとに色んな場所に連れて行ってくれたようで、毎週末、パートナーのお母さんが写真付きでメールをくれたので、カナダでの様子もわかりとても嬉しかったです。

カナダでの生活は、もちろん大変な事も多かったですが、それ以上に新鮮で楽しい事の方が多かったように思います。
生活にも慣れてこれから、という時期に帰国だったので、残念そうでした。

受入準備は、個室の準備・学校の制服などの準備をしました。
個室の準備は、娘が使っている部屋をパートナー用にしました。
学校の制服は兄のものを使用し、上靴などは高校の先生が準備をしてくれました。
後は、受け入れ期間中に GW があったので、遠出で観光などするには事前に予約も必要だったし、値段も高額になる時期だったので大変でした。細々準備もしようかとも思いましたが、来てから本人に聞いて用意するのが一番かと思いそれほどあれこれ用意することはなかったです。
事前にパートナーのお母さんに食べ物の好みなどは確認しました。

訪日の日、乗り継ぎの飛行機に乗り遅れるトラブルがあり、色んな情報が飛び交い正しい情報がないまま空港で待つ時間がありました。カナダの引率の方と日本の教育委員会の方との連携が取れていないのではないかな？と感じました。
結局当日中に到着できたので良かったですが、とても心配しました。カナダの親御さんも心配だったでしょうし、もしこれが渡航の時だったら、と思うと子供だけで海外に行かせている(引率の方はいるとしても)のですから、安全面への配慮が足りないのでは？と感じてしまいました。

来札当日は帰宅時間も遅かったのですぐ休ませ、翌日は桜が見たいとの事だったので円山公園へ行きました。桜がとても気に入ったようでした。
学校生活は心配するほど大変そうではなかったですが、勉強はやり方も内容も全く違ったので、教科ごとに出席、欠席して自習したりを自分で選び、無理なくできるように学校の先生が配慮してくれました。
友達も出来、帰宅後もオンラインでゲームをしたりして楽しんでいたようです。

パートナーの子は日本の歴史や文化を知りたいと言っていたので、北海道神宮や開拓の村に行きました。特に開拓の村はとても喜んでいて、また行きたいと言っていました。
他にも温泉や野球観戦、クラシックコンサートなどに行きました。
事前にどこに行きたいか聞き、できる限り連れて行くようにしました。

日々の生活はなかなか大変でした。
食事の好みが偏っていたので、食べられるものばかり作っていたら、同じような食事ばかりになってしまいました。日本食や食べたことのないものにチャレンジしたいと言うので、色々用意しましたが、そのほとんどを食べずに残すので、途中からわざわざ用意するのはやめました。

持ってきた服がとても少なく、洗濯を頻繁にしなくてはいけなかったのに、何度声をかけても洗濯物を出さなかったりしたので困りました。
部屋もあまり勝手に入ってほしくないと言われたので、それなら最低限の清掃やゴミ出しはしてほしいと伝えましたが全くせず、ゴミだらけにしたので、自分の子供と同じように叱り、それ以降は言ったらやる様にはなりました。

初めのうちは慣れるまでお互い言いたい事も我慢していましたが、慣れてくるとパートナーの子も我儘を言うようになったので、我が家に慣れてくれたんだなぁと思いながらも、こちらも譲れること譲れないことはあるので、その都度きちんと話し合い、お互いの妥協点を見つけるようにしました。

帰国の時は、また絶対日本に来るよ。そしてこの家に戻ってくるから。と言ってくれたので、ほんの１か月のホームステイでしたが、楽しんでくれたのかな、と思い嬉しかったです。

このプログラムを通して、娘だけじゃなく、家族もとても特別な時間を過ごし貴重な体験をさせていただきました。
語学・歴史・文化が全く違う国で色んな経験ができてとても良かったと思います。
娘にとってこの経験が、人生の色々な場面できっと役に立つと思います。

これから参加する皆様へ、親は色々な面でとても悩むと思います。
私も、参加自体とても迷いました。
娘から話を聞いた時は、正直受からないだろうと思っていたので、応募だけでも記念になるかな？と軽い気持ちで応募させました。受かったと聞いた時は、本当に嬉しかった反面、どうしよう…とも思いました。お金の心配、海外の知らない家に娘を行かせる心配、引っ込み思案な娘は大丈夫なのだろうか？受け入れて一緒に生活できるんだろうか？パートナーに快適な生活は提供できるんだろうか？本当に悩みましたが、娘の「行きたい」の一言で決心しました。結果、行かせて本当に良かったと思っています。
子供は思うより弱くないです。自分で色んな事を学び、困難を乗り越える力もちゃんと持っています。親側に、子供を信じ送り出す勇気があればいいだけでした。ですので、悩まずにチャレンジする事をおすすめします。
今回ご協力下さった皆様へ本当に感謝申し上げます。
ありがとうございました。

北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道札幌国際情報高等学校　保護者

今回の交換留学促進事業に参加させていただき、ありがとうございました。この事業を通して、短い期間ではありましたが、様々な面で子供の成長を感じ大変嬉しく思っています。また、カナダからやってきた留学生においても、子供と同様に違う国の文化に接して成長しているだろうと信じています。

【参加までの経緯】

子供は小学生の頃から学校の他に地域で英語を習い、英語は身近な存在のようでした。中学の時に一週間ほどアメリカからの留学生を受け入れる機会がありましたが、この経験を受けて、自分も海外に留学してみたいという想いが大きくなったようです。高校に進学し、より英語を理解し、将来の方向性を考えていく時期にこの事業を知り、迷わず申し込みました。そして、事業に選抜された時から出発を待ち望んでいました。

【準備】

時節柄、コロナウイルス感染に注意しながらの留学ということで、医療面では所定の回数のワクチン接種を済ませ、出発までウイルスに感染しないよう体調管理には十分注意して生活しました。また、カナダに入国する際のワクチン接種の条件なども事前に確認しました。

同時に、留学生を受け入れる際の衣食住の環境について見直しを始めました。居住空間や生活に関するもので足りないものや新調するものを準備していきました。通信面では Wi-Fi ルーターを購入し、ネットワークを強化させました。留学生が到着した際には、トラベル SIM カードを購入し、留学生のスマートフォンにセットしました。また、通学用の制服、お弁当用品も準備しました。

子供のカナダへの出発の準備として、重量制限の範囲内で１か月分の生活に必要なもの、学習に必要なもの、ホストファミリーへのお土産関係、日本へのお土産のスペースを考慮し、出発ぎりぎりまで悩みパッキングしました。

また、渡航先での買い物などができるように、カードを持たせることを検討しましたが、結局、出発が先になってしまい現金を持って渡航することとなりました。事前に現地の通貨の支払い方法について確認し、時間に余裕をもって準備することが大切だと思いました。

出発前にホストファミリーと e-mail で連絡を済ませていたので、現地に到着、合流する際、それから日々の生活での心配は軽減されました。

【カナダでの生活】

カナダにいる子供から定期的に送られてくる LINE やインスタグラムなどで現地での生

活の様子を知ることができました。ホストファミリーから都度 e-mail が送られ、生活の様子を把握し、相談できたので、安心して子供をお預けすることができました。

ホストファミリーは、週末に遠方まで出かけてスキーをし、また留学先の近郊の名所やショッピングセンターなどを案内していただいたとのことでした。これは、私たちが留学生を迎えるにあたり、北海道のどこに案内しようかというプレッシャーになりました。

学校生活では、現地の高校にたくさん友達ができ、校内はもちろん放課後に友達宅や街に遊びに行ったりしているようでした。これらの経験でも日本とカナダの生活文化の違いを肌で感じることができたようでした。

心配されたコロナウイルスの感染予防対策は、通常の生活の範囲内で良いようでしたので安心しました。

カナダでの１か月の留学期間もあっという間に過ぎていき、友達同士の関係も親密になり、友達が日本に来る際は会うことを約束し、将来にわたる絆ができたようでした。また、日本から一緒にカナダに行った仲間たちともよい関係を築くことができたようです。

出国に際して、子供のワクチン接種証明書に一部不備が見つかったため審査で止められましたが、ホストファミリー、自宅の私たちと子供が連携し、必要な証明が確認され、出国することができました。出発前に必要な手続きを確認しておくことが大切だと思いました。

各種位置情報アプリ、航空機情報アプリなどを用いて、自宅から子供の位置を把握しながらの移動となりました。

【日本での留学生】

事前に留学生のご家族とも WEB ミーティングを用いて挨拶をしていたこともあり、スムーズに受け入れができました。

すでに子供たちと留学生は 1 か月間にわたり交流していたことで、コミュニケーション手段が確立しており、飛行機の到着遅延などのトラブルも情報交換を密に行い、大きな問題を回避していました。子供たちもたくましくなったと感心しました。

日本での留学生とは、日本語と英語を用いてコミュニケーションしました。ある程度、日本語の理解力があり、もしかすると日本語だけでも良かったのかもしれないと思いました。留学生の性格、そして言葉の違いなどもあり十分な意思疎通ができず、もしかすると留学生は希望を伝えず、控えめに生活をしていたのかもしれません。食べ物、行きたいところ、生活全般で留学生の希望をかなえられたのか？不安が残りました。

留学生は、日々の学校生活は楽しいと言っていました。食事は、カナダでも日本食や中華に通じていたようで残さず食べていましたが、好みのものだったのかはわかりませんでした。学校から帰宅すると、カナダの勉強があるとのことで、勉強してもらい、それぞれの時間を過ごすこととしました。家族との時間が合う場合は、パズルをしたり、テレビやインターネットを見たりして交流を深めました。

観光としては、事前にどこに行こうと計画しましたが、子供の部活の日程との兼ね合いで、

制限がある内容となりました。週末を利用して、函館に宿泊し、桜をみたり、夜景をみたりしました。お土産を買ったりしました。また、札幌近郊の観光名所を訪れました。ちょうどゴールデンウィーク期間と重なっていたので、留学生はもっと学校に行きたかったと思っていたかもしれません。

滞在期間中は、幸い大きな体調変化もなく１か月を過ごすことができましたが、１度、軽い風邪症状の時は、近医を受診するかどうか判断に迷いましたが、最終的にはカナダからの持参薬を服用して回復したので安心しました。

【最後に】

全体を通して、無事にこの事業を終了することができました。お互いの文化、考え方を尊重し、そこから何かを見出していく作業の連続だったかと思います。このことは、将来に向けてきっと有益なものとなっていくことでしょう。ここでやり足りないなと感じたことは、何かに活かすことができる機会が訪れたときに実行することを忘れないようにしたいと思います。この事業に参加して、これらのことを学びました。

この事業に関わられた北海道教育委員会の担当者の方をはじめ、北海道札幌国際情報高校の教職員の皆様、生徒の皆さんに感謝を申し上げます。

カナダ交換留学を終えて

北海道千歳高等学校　保護者

受入れに際して留意したこと、苦労したこと

　娘がカナダから帰国して１ヶ月後リリーが我が家にやってきました。
受入まではリリーのお母さんのディーンとメールのやり取りを数回していましたが、その内容はお互いどこでもスマホが使えるように SIM カードを準備する事や学校に着ていく服装についてや現金についてなどお互い Google の翻訳アプリの力を借りて何とかやりとりができました。通話については無料アプリで利用していたのでスマホについては不便なく利用ができていたかと思います。
　学校に着ていく制服については千歳高校では無料で貸してくれてなおかつその制服をカナダへ持って帰るのもオッケーとの事でリリーは凄く喜んでくれました。
　後、日本でもほぼカードは使えるという話をしていたのですがエスコンフィールドで野球観戦をしてその後リリーが家族へのお土産をたくさん選んでレジへ向かったところ困ってる様子、私がすぐに行って確認したところリリーが持っていたデビットカードは使えないと・・現金が使えない F ビレッジでデビットカードが使えないってどういう事？？って思いましたが１万以上の買い物だったのでリリーもそこまで手持ちの現金がなかった為立て替えて支払うことは出来たのですがそういうところも事前に確認が必要だなと思いました。

　食事についてはある程度何を食べさせようか考えてリリーも事前にたこ焼きが食べたいなど娘から聞いていたので作ってみたものの、結果数個食べて終わり、リリーは生卵アレルギーがあるのとマヨネーズ、ケチャップはダメ、生魚＝寿司、刺身、サーモンもダメ、
よく食べてくれたのはブロッコリー、人参、きゅうりなどの野菜、ブドウ、りんごのフルーツ、お肉は大好きだったので肉料理は良く食べてくれました。朝はシリアルにサンドウィッチ、土日はパンケーキなど食べてくれましたがこんなに食の文化も違うのかと１ヶ月悩みました。でもお弁当だけは毎日残さず食べてくれたことは本当に嬉しかったです。

　休日の外出については海のないエドモントンということもあり石狩浜へ行ってはしゃいでくれたり、白老、室蘭からの洞爺湖温泉一泊旅行、札幌の夜景に連れて行ったり、なかでも洞爺湖では２人に浴衣を着せて花火を見せてあげた事が良い思い出になったかなと思います。
　後、リリーはゲームとアニメが大好きだったのでまだカナダで発売されてないアニメの本や帰国前日に発売のゲームソフトも予約した時には今までで１番の喜んでる姿だったかもしれません。

GU やユニクロ、ドンキホーテとあちこち連れて行きましたが 1 番はコーチャンフォーとゲオがお気に入りだったのかもしれません。そこはもっと早くに気付くべきでした。

本事業が家庭にもたらした効果について

交換留学については普段からあまり積極的でない娘がカナダの交換留学に応募すると言い出した事に、えっ、まさかって思いましたが高校生で留学なんてこんな貴重な経験が出来るなら行かせたいと私も面接は必死だったかと思います。娘がカナダのホストファミリーの家で過ごすという事は今後においても本当に良い経験になったのではないでしょうか。途中でホームシックになりながらも 1 人でカナダの学校からバスに乗って帰ってきたりと成長を感じさせてくれました。今となってはカナダに行ってる間心配の 1 ヶ月でありリリーを受け入れてる 1 ヶ月はあっという間で娘にとっても私にとっても今後の人生においてこの留学が役に立つ日が来ると思います。

本事業全体に係る感想や課題と感じること

リリーと娘があまり家で話さないので心配で娘に聞いたところカナダでもそうだったよと、カナダではご飯を食べだ後みんなそれぞれの部屋に入るので心配しなくても大丈夫だよと娘に言われましたがリリーが楽しんでくれてるのか不安な事やホームシックにかかってないかなど凄く心配だったことをリリーが帰国後リリーのお母さんのディーンに話したらディーンも娘がカナダにいる時全く同じ気持ちだった事話してくれました。そんな心配をよそにある日居酒屋へ行った時、2 人はダンスが得意なので流れてる曲で踊って楽しく笑っている姿を見たら安心しました。言葉だけじゃないんだなと感じましたが受け入れる方も子供だけに頼らず私自身もう少し英語がわかっていればコミニュケーションがとれたのかなと感じました。

リリーも言葉が伝わらず苦労してたんだろうなと思います。

トイレの水の流し方がわからなかった事、カードが使えず困っていた事、帰りの飛行機で荷物の重量オーバーで困っていた事、身近のちょっとした困った出来事ではありましたがこの文書が、今後の事業に活かしていただければ幸いです。

最後になりますがリリーが帰国する日は娘の友達も家まで見送り来てくれて涙のお別れをし、その後千歳空港でもみんなに書いてもらった色紙を渡してリリーとハグしてお別れの時は本当に泣けました。参加して良かった・・と。

ありがとうございました。

報告書

北海道北広島高等学校　保護者

留意したこと、苦労したこと

　食べられないものが多かったことです。食生活が違って、食べられないものが多く、特に、学校の日の弁当の献立を考えるのに苦労しました。冷えたご飯が苦手だったようで、パン食に変えました。また、疲れもあるのか、お腹の調子が悪くなりやすく、本人の体調をこまめに聞きました。英語と日本語のバランスにも留意しました。

本事業が家庭にもたらした効果

　私自身が英語を勉強し始めました。息子がカナダに限らず、海外に興味を持つようになり、そして、これまで以上に協力して行動するようになりました。

感想や課題

　北海道の事業としてこういう留学制度を行ってくれたことに感謝します。
　視野が広くなり、周りの様々なことを国際的に考えられるようになりました。英語が話せると、他の国の人と話せるということを改めて感じさせられましたし、また留学をするという目標もできたようです。
　派遣先の学校であるリンジーサーバーは留学生の受け入れを積極的にしていて、特に不自由は感じなかったようですが、日本の高校は受入れに慣れてなく、留学生にとって困ったことや大変なことも多くあり、それに伴って、日本人側の留学生の負担も増えたように思います。

令和４年度(2022 年度)北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業研修報告書

北海道登別明日中等教育学校　保護者

■参加の経緯

私たちの家庭では、長男が「令和元年度北海道・ハワイ州高校生交換留学促進事業」の留学生受け入れ参加者となった経験があります。わずか 10 日間の滞在でしたが、当時中学生だった次男にも大変大きな転機となり、自分自身も留学生のホストとなり、北海道を紹介したい、外国へ行ってみたいと強く思うようになりました。また、次男が通う北海道登別明日中等教育学校では、多くの留学生を受け入れ、日常の中に国際交流があります。留学生が日本で学ぶ姿を見るうちに、自分もそのような立場で新しいことを知りたいと、留学への希望を募らせていました。

■参加の決定とパートナーとの事前交流

幸運なことに参加が決まり、パートナーの連絡先が知らされてからはまずは子ども同士が「WhatsApp messenger」アプリで連絡を取り始め、子どもがカナダへ行った際の希望などを聞いてもらいました。

カナダ側では宿泊を伴う週末の予定が決まる都度、私たち保護者への相談や同意のために、子どもを通じて連絡を寄せてくれるようになり、保護者も互いにビデオ通話で連絡を取り合って準備を進めました。顔を合わせての連絡は、日本とカナダには 16 時間の時差があるため、週末を使って日本時間では日中、カナダ時間では夕方から夜にかけてのタイミングで行いました。このような事前交流は互いへの理解にとても役立ったと感じています。子どものカナダ滞在中も、週に数回程度写真を添えて生活の様子を伝えてもらいました。

■受け入れの準備

家庭内では、１か月間の滞在が留学生にも私たちにも快適なものになることを考え、家具を動かすなどの模様替えをしました。１日の流れは、子どもから聞いていたカナダでの習慣を参考にして、こちら側の習慣になじんでもらうための工夫を考えておきました。その１つが洗濯の習慣です。カナダのホームステイ先では週に１度の洗濯だったというので、（実際子どもがカナダに行くときにも１週間分の着替えを持ってくるように言われていた。）留学生用の部屋に洗い物を毎日入れてもらうためのバスケットを用意しました。

学校に通うことについては、通学に JR を使うので、定期券を買うための通学証明書の発行や制服の貸し出しを学校にお願いしました。また、学校生活で必要なものを教えてもらい、子どもを通じて伝えました。

４月中旬から５月中旬の滞在の中で、週末、大型連休の過ごし方についても、どこへ連れて行き、どんな経験をさせたらいいのか思案に暮れました。子どもと一緒に同じ学校に留学した２人の生徒さんのご家庭と何度も連絡を取り合い、互いのアイディアを参考にして決

めました。特に、大型連休は宿泊のために早めの予約が必要で、予算との兼ね合いも考える必要がありました。

■留学生が到着して

子どもが先に留学し、パートナーとは関係ができていたことと、私たち保護者もビデオ通話で会話をした経験があることが、留学生の緊張を軽減しました。

カナダ人留学生にとって、日本の学校生活は時間的な拘束が長く、毎日とても疲れていました。帰国が目前になってから聞いた話によると、最初の１週間は、慣れない日本の習慣と学校での疲れで、もう帰りたいと思っていたそうですが、２週目くらいからは、学校で友達ができたり、自分なりのルーティンができ、楽しみを見つけて暮らして行こうという上向きな気持ちが出てきたそうです。学校での友達が家に遊びに来てくれ、一緒に食事をしながら楽しめる機会もあり、私たちの子どもとだけの関係だけではなく、留学生自身が自分で作っていく人とのかかわりが本当に大切だと実感しました。また、滞在中に授業参観日があり、学校での様子を知る機会がありましたが、どの生徒さんも親切に接していました。カナダのご両親にビデオ通話で学校での様子をライブで伝えると、とても安心されていました。

家庭では日常の中で、留学生がカナダとの違いに気づく都度、それがきっかけとなってカナダのことをよく教えてくれました。とても印象的だったのは、州によって異なる産業とそれに基づいた特徴、カナダの社会的な構造や歴史的な変化、日本でもよく知られているカナダの主要都市の概要など、様々なことについて具体例や数値を引用して説明してくれたことです。一人のカナダ人として自分の国のことを自分の言葉で伝えられる様子に、感服しました。そういう意味でも、私たちの家庭にもたらしてくれた効果は大変大きいと感じています。

■おわりに

この素晴らしい事業は、北海道の 10 名、アルバータ州の 10 名の個々の経験にとどまらず、この 20 名が出会ったすべての人々にかけがえのない経験をもたらしたと考えています。実際、子どもがカナダを訪れたことがきっかけとなり、日本に興味を持った友人がいます。そして、私たちの家庭に滞在した留学生も学校でできた友人にとどまらず、通学途中で出会った人たち、一人で立ち寄った店や喫茶店などで言葉を交わした人たちなど、多くの人の記憶に残ったと思います。高校に留学生がいるという状況は多くの学校にとって珍しく、そのような機会に出会うことはとても貴重なことだと思います。高校生という多感な時期に留学生に出会う機会が、どのように影響するかははかり知れません。この機会を最大限に生かして、より多くの高校生にこれを還元できる仕組みがさらに整えば、カナダから来日する留学生にとってもより充実した経験になると思います。

一方で、言葉の面ではカナダ人留学生の日本語能力が初級段階で、意思疎通には私たちが英語を使って対応せざるを得ない状況が日常でした。留学生の目的意識や性格などによりますが、日本語に対する積極的な学習意欲を持ち合わせているかどうかが留学生活の印象を左右し、場合によっては、精神的健康面に影響すると思われるため、英語を存分に話せる環境として他のカナダ人留学生と会う機会を作りました。留学生が北海道での生活を楽し

かったという記憶とともにカナダに帰国することこそが、ホストファミリーとしての願いです。そのためには、家庭と事業の担当者、受け入れ校との間には緊密な連絡体制が必要だと感じました。

　最後になりましたが、この度の事業に参加させていただいたことに大変感謝申し上げます。北海道登別明日中等教育学校の教職員の皆様と生徒の皆様、北海道教育委員会の担当された皆様、子どもたちを引率してくださった先生方、カナダのご担当者様など多くの方々のご尽力によって、無事に終えることができたと考えています。また、一緒に参加された生徒の皆様とご家族の皆様にもご協力いただきました。皆様、本当にありがとうございました。

令和４年度　北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道旭川東高等学校　保護者

【受け入れに際して留意したこと、苦労したこと】

まず食事に関しては、事前のアンケートではアレルギーや好き嫌いはないとの事でしたが、実際は食が細く好き嫌いもあり、大変苦慮しました。

朝食は自分で好きなものを選んでもらうスタイルにし、昼食のお弁当には玉子焼きとプチトマトを残してもあきらめました。夕食はメニューを伝えて食べられそうか確認するようにしました。生魚を食べたことがなく、最初は戸惑っていましたが後半には刺身、回転寿司、海鮮丼も美味しく食べていました。

時間に関しては、日本人とはまるで感覚が違うと感じました。朝の通学時間ギリギリになってから、トイレに入ったり歯磨きを始めたりして、電車の時間に間に合うか心配でした。また、毎回靴紐を結びなおすため、出かけるまでに時間がかかりました。

そのため、遠出をするときなどは、予定の時間より早めの時間を本人に伝えるようにしました。洗濯や掃除に関しても無頓着なようで、こちらから洗濯しないのか聞いたり、掃除もゴミ出しも週に一度するように言ったりしましたが、床や机に物が散乱していました。どうしても気になるゴミや洗濯物は回収しましたが、それ以外は本人の好きなようにさせていました。

学校での受入に関して、担任の先生を通じて学校と連携し調整しました。子供は理系で物理を選択していましたが、留学生の好きな生物を選択させてもらいました。日本語だけの授業は、難しいので、１年生と一緒に書道の授業を受けたり、他の学年の体育にも参加したりしました。また、学年行事として運動会を開催してくれたりしました。

娘が陸上部に入っていて、大会が近く練習があるときは、英語部の同級生が留学生と一緒に他の部活の体験や、遊びに付き合ってくれました。また、カナダと異なり、学校の時間が長く疲れていたため、来日２週目より一人で電車に乗り先に家に帰ってくることもありました。

【本事業が家庭にもたらした効果について】

家族で協力したり、相談したりすることが多くあり、今まで以上に家族の結束力が高まったと思います。留学生のことを気遣って想像したり、考えて行動したりすることで、思いやりが身につきました。休日に、近郊や少し遠いところに出かける計画をしたりして、企画力が高まりました。海外の人に対しての偏見がなくなりました。

【本事業全体に係る感想や、課題と感じること】

３年間のコロナ禍で、人と交流することが抑えられてきたところで、いきなり留学生の受入ということで、最初は恐れおののき、医療現場で働いている私にとっては、職場に言いづ

らい状況でした。しかし、子供が先にカナダ留学して、ホームステイ先の家族に大変好意的に受入れてもらい、生き生きと楽しんで帰国したのを見て、こちらも頑張らなくてはと俄然意欲が湧いてきました。

カナダ人留学生を１か月受け入れてみて、実際大変なこともありましたが、毎日が驚きと発見の連続でした。私の当り前は彼女の当り前ではなく、その逆も然りです。多様性を求められる世の中で、そのことを思い知らされる日々でした。

帰国近くのある日、留学生が私にカーネーションをプレゼントしてくれて、私の気持ちは報われました。彼女が彼女なりに日本を感じて楽しんでくれたので、それで十分だと思いました。私はそのお手伝いができて、本当に良かったと思います。

交換留学促進事業に関わる研修報告書

北海道釧路湖陵高等学校　保護者

【はじめに】

娘から留学に応募したいという話があったときは正直驚きました。あまり積極的ではない娘なので留学をしたい意思が強いと判断し、不安はありましたが異文化に触れる絶好の機会であり全力でサポートしようと決心しました。

カナダのことを調べていく中で壮大な自然や食文化に親ながら大変興味を持ち、選ばれた時は非常に嬉しい気持ちになったのを記憶しています。

【受け入れ準備】

アリーアが日本で生活するにあたっての計画を家族で相談し、まず部屋の確保をするために掃除や断捨離、またカーテンでしきりを作るなど個室になるよう工夫しました。そして家で生活するための食器等の購入、学校生活に必要な制服やお弁当箱の準備をしました。制服の準備に関しては学校に相談させていただき学校の方で準備してもらい助かりました。

【日本での生活】

アリーアは日本の食文化に興味があるということだったので、いろいろな日本食にチャレンジしてもらいました。納豆や梅干しはさすがに食べれませんでしたが、だいたいの日本食は食べてくれました。寿司やラーメン、天ぷらなどの定番はもちろんですが、中でもおにぎりが一番印象に残ったというのには少し驚きました。

学校生活はカナダの自由な校風とは違うので心配していました。登校当初はさすがに疲れたようでしたが、自習の時間をつくってもらったり、友達ができてくるにつれ学校生活も楽しんでくれたのではないかと思っています。

日本の文化にふれてもらうために温泉旅行や着物を着てみる計画を立てていました。温泉に入るのは抵抗があったようですが、温泉街を散策したり、朝食夕食のビュッフェは美味しそうに食べていました。着物は非常に似合っていていい思い出になったのではないかと思います。他にも休日には家にいるよりも硫黄山や摩周湖など観光地に出かけたり夜景を見に行ったりしました。アリーアはドライブと写真が好きだったので喜んでもらえました。

【カナダへ帰国】

大きなキャリーバッグをひくアリーアを見て感慨深いものがありました。大変な事もありましたが、アリーアは私達家族に刺激を与えてくれ視野を広げてくれたと思います。アリーアには感謝の気持ちでいっぱいです。

　別れ際に娘とハグをしていましたが、その光景が微笑ましくもあり寂しくもありました。２人とも精神的に育ち再会できることを心より願っています。

【検討課題】
・留学生が新千歳空港に着く際に、飛行機が飛ばず今日は到着しないとの連絡がありましたが、留学生からは遅れるがその日に到着するとの相反する情報がありました。結局そのまま待機していたので遅れて到着した留学生を無事に迎え入れることができたのでよかったのですが、変更になった場合は教員間で連絡を密にとる必要があると考えます。
・学校生活において、学校側がより積極的に留学生受け入れに協力してもらえると助かると思います。

【結語】
　この度のアルバータ州北海道交換留学に関わって下さった皆様方に心より感謝申し上げます。娘は非常に大きな経験をさせていただいたと思います。カナダでの経験、留学生との交流はもとより、同じくアルバータ州に留学した北海道の生徒との関係も大変為になったと思います。この留学を今後に活かしていけるよう親としてサポートしていきたいと思います。
　本当にありがとうございました。

４　教員編

（引率・受入担当）

令和四年度 高校生交換留学促進事業の往路引率を終えて

北海道北広島高等学校

令和５年２月２５日～３月４日まで、カナダアルバータ州への交換留学往路引率をして参りました。令和２年度及び令和３年度は、新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインによる交流でした。期間も４週間と短くなりましたが、生徒たちにとって実りある時間であることは間違いありません。

往路引率を行うにあたり、「生徒たちがなるべく多くの〝気づき“を得られるように配慮する」ことを、自分自身の目標として掲げました。生徒たちには、「今、どういう状態なのか」、「この後、いつまでに、何を、どうするべきか」、或いは「何時までに、どこに、どんな状態でいるべきか」などを自分で判断することはもちろん大切ですが、集団で行動するときは、周りの人とその情報を共有することを伝えました。時間に限りもあり、半ば流されるように行動していたため、あまり覚えていないかもしれませんが、その記憶がどこかでよみがえることを期待しています。

＜カナダ到着！＞

バンクーバーに向かう途中、リアルな「お客様の中でお医者様はいらっしゃいますか」を聞き、着陸後も救急隊員が患者を搬送するまでそのまま着席しているように言われるという、ちょっとしたレア体験をした生徒たちも、何とかキオスク通過、入国審査通過。しかしなぜか最後の税関通過の際に、一人の生徒が「何か書類が足りないと言われた」ということで、全員であちこちたらいまわしにされ、最終的にもう一度その係のところに行ったところ、全く問題なく通過でき、早速「（英語という）洗礼」を受けた形になりました。何人かの生徒はこの洗礼を通じて「人任せにしない」で「自分で切り開く」ことの大切さを学んだようで、良い経験となりました。

エドモントンでは生徒たちを迎えに、遅い時間（予定より１時間半遅れ）にもかかわらずホストファミリーが来てくれました。それぞれが渡航前からメールやオンラインで交流していたようで、「やっと会えた！」という交流しあう様子が印象的でした。

＜学校では…＞

どの生徒も、「大きさ」「生徒数」「授業のバリエーション」そして「ダイバーシティ」及び「LGBTQ＋への理解の深さ」などが印象に残ったと言っており、そんな学校で授業を受けることが不安な反面、とても楽しみだと言っていました。今回は４校にお世話になりましたが、日本にいる時からある程度学んでみたい授業を挙げて、実際には登校して決まったようです。学校によっては初日に英語の試験を行い、その結果をもとに授業を検討するというきめ細やかな対応をしてくれる学校や、日本語のクラスの生徒たちを中心に、歓迎会をしてくれた学校もあり、とても好意的に生徒を受け入れてくれました。ここから生徒たちの本当の意味でのカナダ生活が始まりますが、どの生徒もパートナーや、それぞれの学校の担当の先生に支えられながら、目標を達成するように頑張る、という意気込みを見せてくれました。

＜最後に＞

この引率業務を行うにあたり、事前準備の段階から、現地滞在時、そして帰国後のフォローに至るまで、本当に多くの方に助けていただいたお陰で無事に終えることができました。心から感謝しております。

どうもありがとうございました。

令和４年度　北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業に係る報告書

北海道札幌月寒高等学校

ア　受入に際して留意したこと、苦労したこと

少しでも留学生の希望に添うような教育活動を実施するために、本人と事前にメールでやりとりして、授業案作成や放課後のクラブ活動体験などを計画した。また自習室を設け、プライベート空間と自身の課題に取り組める時間を設定した。学年の協力もあり、受入は特に問題なかった。本人とのメールのやりとりが時差や返信遅れでタイムリーにできなかったのが、多少苦労した。

イ　本事業が自校生徒にもたらした効果について

現在オンライン交流などで海外に友人を持つ生徒も増えたが、皆が異文化交流に興味を持っている訳ではない。また ALT との授業も限られているため、まだまだ多くの生徒にとって海外の人と交流する機会は限られているのが現状である。そのことからも今回本校生徒のパートナーが直接来校できた効果は非常に大きかったと考える。直にほんの少しでも話をするだけでも生徒に笑顔が広がった。頑張って日本語を使おう、理解しようという姿勢に自分を重ね、英語を使ってみようと自然と英語が口から出た。そんな場面を少なからず目にすることができた。ゴールデンウィークを挟んでいたため、交流期間は短いが、確実にお互いにとって良い経験となったと考える。

ウ　本事業全体に係る感想や、課題と感じること

コロナ禍で久しく対面での交流ができなかったが、改めて直接交流することの大切さを感じることができた。本校参加生徒も積極性が増し、色々なことに挑戦しようという気持ちが表にでるようになった。また一層学業にも励み、受験勉強にも力が入っている。パートナーも慣れない環境の中、積極的に日本語を学び、日本文化に触れようと努力していた。特に私の受け持った授業では異文化理解に重点を置いていたため、ちょっとしたやりとりでも生徒の刺激になった。

一方、パートナーの受入学年が３年生だったことと本人の日本語レベルから、参加できる授業が限られてしまった。やはり受験を意識した授業や古典の授業などは本人からも参加するのが難しいと申し出があった。学年の枠を超えて１、２年生の授業に参加するにしても、４月の慌ただしい中での受入のため、準備ができなかった。

本校受入生徒が女子生徒で、パートナーが男子生徒であったため、留学生に対するクラスや学年での交流が狭まったように感じた。カナダではそれほど男女差はなく放課後なども交流するが、日本では本校生徒の女子生徒の友人との交流に限られる傾向になり、男子生徒とも少しうまく関わりが持ちきれなかったように感じる。また異性同士ということもあり、深くつながるにはやはり多少壁があるように感じられた。ただし、異性同士だからこそ得られた体験ももちろんあったと考える。

今回の受入は４月の慌ただしい中であったため、受入の準備が十分に整いきらなかった。また平行して来年度の受入手続きもあったため、担当の負担が大きかった。

令和４年度（2022 年度）北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業をふりかえって

北海道札幌啓成高等学校

１　選考から本校生徒派遣まで

本校からの派遣生徒と家族は派遣決定後から早速カナダの受入家庭との連絡を取り始め、アルバータ派遣からアルバータ生徒の受入まで、本校担当者も適宜加わりながら、終始円滑に意思疎通が行えた。

２　アルバータ州生徒の受入について

（１）　受入前

４月中旬の受入に先立ち、担当分掌（企画総務部）が教職員に受入計画を示し、受入期間や受入生徒の情報、各種の対応方法（受入全般、制服と教材、日本語学習、時間割等）について情報共有することにより、学校全体の取組という意識を校内で醸成することができた。

（２）　受入中

アルバータ州生徒は、滞在中は本校からの派遣生徒と同じＨＲに所属し、座席や教材、制服（卒業生から借用）や時間割、オリエンテーション資料（日課、校則、開講科目、部活動等）等も用意され、スムーズに登校が始まった。初日には教職員への紹介、放送による全校生徒への挨拶があり、また留学生の紹介ボードが生徒玄関に設置され、全校で歓迎する雰囲気作りに努めた。

授業については、登校１週目に所属ＨＲの授業を一通り経験してもらった後は、本人の興味や希望も考慮しつつ、ＨＲ担任が毎週、留学生用の時間割を作成した。クラスや学年をまたいで様々な授業に参加することにより、多くの生徒たちと交流することができた。また調理実習や書道等の実技的な授業では、生徒たちが留学生に英語で手順を説明する等の機会も多くあった。

英語の授業で留学生にカナダについてプレゼンテーションをしてもらう機会もあったが、本校のような大規模校では全てのクラスは訪れられないため、自分や家族、自分の町や学校について紹介する短い動画を作成し各クラスで流すことにより、全校生徒に留学生について知ってもらえた。

古典や地歴公民等の留学生には難しい科目の時間は、日本語学習や自習、カウンセリングの時間としたが、受入担当教員に加えて、日本語学習歴のある本校のＡＬＴが留学生のサポートで大いに貢献してくれた。また滞在期間を通して「日誌」を記入してもらい、毎日の授業内容や感想、フィードバックやサポートの必要なことについて知り、受入環境の改善に役立てることができた。

留学生本人が明るく積極的な性格であったこともあり、１か月で学校にすっかり馴染むことができ、登校最終日にあった全校集会では全校生徒に挨拶をし、さらに帰りのＨＲ後に盛大に行われた送別会ではクラスメイトから色紙や贈り物をもらい、本校での滞在を感動的に終えた。

３　事業の効果・課題

今回の受入の時期は政府によるコロナ対策の緩和と各種の海外交流プログラムの再開とも重なり、その後の校内外での国際交流プログラムには本校生徒の一層積極的な参加が見られた。同世代同士の国をまたいだ交流が、これまでに学んだ英語をより実践的なレベルに高めたいという意欲につながることが明白である。受入の際には様々な新たな業務が生じるが、校内でのノウハウを体系化し、多くの職員間で協力して進めることにより、持続可能で多くのメリットを生じる取組として継続できるだろう。

令和４年度（2022 年度）高校生交換留学促進事業に係る研修報告書

北海道札幌手稲高等学校

１　はじめに

３年前に本事業による交換留学を希望した生徒がいたものの、新型コロナ感染症の世界的大流行に伴い断念した経緯があり、今回本事業に参加できたことは大変喜ばしいことでした。英語に興味・関心が高い生徒が多く、ESS 部もある本校ではありますが、本事業への参加は過去 10 年ほどありません。今回の参加を契機に、次年度以降も交換留学を希望する生徒に機会を提供できればと思います。

２　事前準備

受け入れに際し、事前に生徒指導上の注意事項（生活文化の違いや校則など）、本校で受けられる科目一覧、本校にある部活動・同好会一覧をメールで伝えました。なお、登校後の最初の１週間はパートナー生徒とともに３年次の授業を受け、２週目以降は留学生の興味・関心に応じた授業を受けることを提案しました。また、放課後は興味のある部活動に参加することが可能であること、日本語の学習のために自習時間を設定することが可能であることも併せて伝えました。

受け入れ校側としては教職員への留学生のプロフィールと留学期間を事前周知し、担当年次団への助力をお願いしました。また、教科担当者には予備の教科書や教材を準備していただきました。

３　留学生の受け入れ状況

受け入れ初日はオリエンテーションを実施する予定でしたが、本校の学校行事日程変更に伴い、ごく短時間の確認のみで授業に参加しました。ホストファミリーが英語に堪能であり、授業や学校のルールについても事前に十分確認できていたため、順調に１日を過ごすことができました。１週目についてはパートナー生徒と同じ授業を受けましたが、教科担任の助力もあり、特に問題なく授業を受けることができました。ただし本人の日本語能力は基本的な日常会話ができるレベルであったが、国語、特に古文については教科特性上、難しいと感じる場面が多かったようです。１週目が終了した時点で、２週目以降の授業選択について確認したところ、数学Ⅲおよび物理に興味を持っていたため、一部パートナー生徒とは違う授業を受けることとなりました。教材の準備や理解度のフォローなど、教科担当者のおかげでスムーズに授業を受けることができました。なお、できるだけ教室内で授業を受け、日本語を学ぶ機会としたいという留学生の強い要望から自習時間は設定しませんでした。

放課後の部活動については、時期的な問題（高体連前）ということもあり十分に参加できたとは言えませんが、所属するクラスの友人たちの部活動を見学することができました。また、顧問の先生方のご協力もあり、一部の運動部では練習に参加させていただけました。

留学生自身が大きな問題なく日本での学校生活に対応できていたこと（アルバータ州側引率教員によるカウンセリングでも問題点は特に出ませんでした）、ホストファミリーによる留学生へのフォローが万全だったこともあり、全日程をとおして、大きなトラブルもなく無事受け入れを終えることができました。

本校生徒にとっても、普段学んでいる英語を実際に使用しコミュニケーションをとる経験

ができたことに大きな意義があったと考えます。留学生本人の人柄によるところも大きいのですが、教室内で多くの友人たちと授業内容や日常生活について語り合う様子が多々見られました。今回の経験を経て、多くの生徒たちが英語学習への意欲を高めることができました。また、今年度は日程の都合で実施できませんでしたが、次年度以降本事業に参加できた場合は、本校 ESS 部の活動に参加してもらうなど本校生徒とさらに交流を深め、英語学習への意欲喚起の一助としたいと考えています。

４　おわりに

課題として感じたのは年度末派遣および年度初めの受け入れという日程ですが、次年度以降は年度内に派遣と受け入れが完結するため、解消されると思われます。本校としては担当者の変更等もあり、手厚いサポートをしきれたとは言いがたいのですが、留学生本人やパートナー生徒の人柄、ホストファミリーや教職員の支えや協力で受け入れを成功させることができました。本校生徒にとっても英語学習への動機付けに良い影響がありました。本事業に携わってくださった皆様に、深くお礼申し上げます。

交換留学を受け入れて

北海道札幌白石高等学校

今回、本校としては初めてアルバータからの留学生を受け入れることになりました。何をどのように準備して良いのやら戸惑う場面が多々ありましたが、他校で留学受け入れ経験のある先生の資料を参考に、様々なことは想定し準備をしてきましたが、来校する留学生も個性があるので、まずは会ってからカリキュラム等を考えいくこととしました。本校の留学生は、当初、とても内気な生徒で、最初の日は、挨拶もできないほど緊張していましたが、予想以上に早く学校に慣れ、話の出来る友人も少しずつ増えていきました。自分から積極的に友人を多く作るといった行動はあまり見られなかったので、授業を活用して、できるたけ本校の生徒と多く会話できる機会を設けたり、本人と毎週面談をし、その都度カリキュラム等も変更したりと、できるだけ本人の希望に沿うような学習環境にしました。

面談を繰り返すことで、担当教員には心を開き、面談の中にホームステイ家族との話をしてくれるようになりました。

本校に常駐しているＡＬＴの先生が同じカナダ出身と言うこともあり、何かと留学生の相談にのってくれていたのは、担当として大変助けられました。同時に留学生にも心強かったのではないかと思います。留学生の日本語の学習意欲はとても高いものがありましたが、話すことには慣れてなかったため、パートナーや友人、ＡＬＴとの会話を通じて少しずつ話すことにも慣れていきました。留学終了の最後のスピーチでは日本語で挨拶をし、たった１カ月ではありましたが、日本語もさらに上達したように感じています。

学校生活では、本人からは特に問題となるようなことはなかったと聞いていますし、何か困ったことがあればすぐに伝えてくれたので、早急に対応することができました。とても素直な性格の生徒だったので、学校生活にはすぐに順応できたようです。しかし、本校には、日本語を学習する際の教材や留学生が授業を受ける際の教科書が不足しており、日本語学習教材については、担当が個人的にもっていたもので対応しました。今後は日本語学習教材の斡旋や補助していただけましたら各学校でも活用できるのではないかと思いました。

留学生受け入れは、学校全体の受け入れ体制の確立や留学生・ホストファミリーとの連絡・調整等、気を遣うことやらなければならないことも多々ありますが、生徒にも学校にも多くのメリットがあり、特に留学生と接した生徒達の変化を肌で感じることが出来ました。今後も機会がありましたら協力をしていきたいと思います。

今回の受け入れにあたり多くの方々にお世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

令和４年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業研修報告書

北海道札幌国際情報高等学校

１．はじめに

本校は国際交流を一つの柱としており、生徒の多角的な視野の育成に力を入れている。様々なプログラムに関心を持つ生徒が多く、コロナ禍では主にオンラインによる交流となったが、この他にも、米国・中国の姉妹校と友好交流校との交流などを行っている。アルバータ州からの本事業による留学生の受入れも大切なプログラムであり毎年継続している。また、AFS 年間留学生や世界・アジアの架け橋事業などによる留学生の受け入れも行なっており、ほぼ同時期に２名を受入れることとなった。さらに、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」などにも毎年派遣している。事前の準備や調整、オリエンテーション等の実施は国際交流部担当教員が行ない、日常の学校生活に関わる直接の指導はパートナー生徒の所属する HR 担任や各教科の担当者に全面的な協力をいただいている。

２．カリキュラムについて

（１）ホームルーム、時間割等の学習活動について

ホームルームはパートナー生徒の在籍する３学年のクラスに所属し、本校生徒と同様の時間割を基本とした学校生活を体験してもらった。パートナーが国際文化科所属であり、すでに１名の男子留学生もいたため、クラスにすぐに馴染めたようだった。時間割については、国際文化科であるため外国語（英語や第２外国語）の授業が多かったが、できるだけ日本語による授業に参加できるよう作成した。特に意識したことは、学科や学年を問わず留学生の希望科目を入れることであり、「英語理解Ⅱ」や「英語表現」、「プレゼンテーション」といった外国語に加え、「数学」、「生物」、「世界史」、「体育」、「家庭基礎」、「生活科学」や、芸術選択科目の「書道」、「美術」、さらに日本文化に触れる機会を持ってもらう意味で、「日本文化」に参加してもらった。全学年の生徒と触れあう機会ができ、本人はもちろん本校生徒にとっても有意義な時間を過ごすことができた。

（2）カウンセリング・日本語学習、自習等の時間について

初日に国際交流部長によるオリエンテーションを行った。本校では２名の男女１名ずつ計２名の ALT が駐在しており、カウンセリングは女性の ALT により行った。日本語指導においては、この留学生以外に３名の留学生がおり、全員が一緒に受けるために週に１時間程度と限られた時間ではあった。しかし、本人の日本語能力が高く、漢字やカタカナを含めて文章を書くことや、授業で日本語の説明を聞いたり黒板に書かれた内容を聞き取ってノートに書くこと、日本語で会話することができていたため、問題なく学校生活と家庭での生活に溶け込むことができたようだった。自習時間については１日に１時間程度設けたが、必ず他の留学生と一緒になるように配慮した。

３．学校生活について

本校在籍のパートナーとの相性が極めて良好で、授業や昼食でもパートナーの友人とも一緒

に楽しく過ごしていた。教室移動や授業内でのお世話など、パートナー以外の生徒も率先して親身に対応していたようだった。通学に関しては、本校のパートナーが部活動で多忙かつ帰宅時間が遅くなるため、登校は一緒に、下校は一人であったが困ることはなかったようだった。学校生活上の学習状況や生活態度等に、最後まで問題なく過ごすことができた。

４．受入に際して留意したこと、苦労したこと

留学生本人とは来日前の早い時期からメールで連絡を取り、学校紹介パンフレットを送付したり本人の希望を確認したりして良い関係ができていた。また、生徒や教職員には写真と簡単な紹介が記載されたポスターを掲示して、受け入れる体制を整えた。さらに、他の留学生３名と日本語の授業や自習時間を必ず一緒にして、孤立せずお互いに協力したり相談したりできる環境を用意した。

年度当初の受け入れだったため、時間割作成や担当教諭への依頼に十分な時間が取れず苦労した。また、本校では短期の留学生は私服着用としており、留学生にも事前に承諾してもらっていたが、来日直前に制服やジャージなどの借用希望があったため用意するのに苦労した。

５．おわりに

本校は国際交流や異文化理解に強い興味・関心のある生徒が多く、留学生の存在自体が生徒の英語学習への動機づけとなっている現状がある。コロナ禍で渡航が難しい時期でもあり、特にその傾向を強く感じた。また、本校の教員は国際理解教育に関して理解があり留学生の授業参加に関して柔軟に対応してくださっている。教員にとっても外国の授業や文化に関する知識を得られたり、本校生徒の新たな一面を見ることができたり、授業自体が活性化したりなどの効果があったと伺っている。

今回は、１ヶ月という短い期間であったため、留学生が満足できるほどの体験ができたとは言い切れない。しかし、留学生から、本校で本当に充実した日々を送れたこと、本校やホームステイ先で得られた経験をカナダの学校で紹介したいといってくれたことは大変嬉しいことである。快く受け入れてくださったクラスメートや担任教諭、教科等担当の教職員、さらに留学生の受け入れ経験があり寛容な姿勢で今回もお世話してくださったホストファミリーのご家庭には心から感謝したい。

プログラム運営にご尽力いただいた北海道とアルバータ州の双方のご担当のみなさま、関係のみなさまに、あらためて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

令和４年度(2022 年度) 北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道千歳高等学校

１　はじめに

本校は国際交流が盛んな学校として国際流通科、国際教養科、普通科の３ 学科を抱え、台湾への見学旅行、国際教養科の海外語学研修の他、アラスカ州ダイモンド高校への長期・短期留学への参加やメール交流、韓国空港高校とのオンライン交流など、生徒の国際感覚を育て、外国語を使う機会を多く設けています。本事業では、１ヶ月間留学生を受け入れることで、文化の違いを学び、生徒達が国際交流への興味をさらに高める貴重な機会となりました。

２　留学生受入に当たって

授業を担当する先生方に授業での対応が可能かを確認し、１ヶ月の短い期間であること、単位認定も不要ということから全ての授業でパートナーと同じ授業に参加してもらいました。また、ちとせ緑の財団より制服を譲っていただきました。

３　本校生徒にもたらす効果

留学生のリリーさんは、日本語の授業を受けていることもあり、クラスの生徒ともすぐに打ち解け、日本語で積極的に話している様子が見られました。授業中はペアワークに参加したり、生徒からの英語に関する質問に答えたり、英作文を披露してくれたこともあり、クラスの生徒たちに良い刺激を与えてくれました。また、クラスでプレゼンをして欲しいという依頼にも快く答えてくれ、カナダの学校生活、習い事や友人の様子をスライドにして紹介してくれました。全校生徒の前での挨拶も物怖じせず、帰国前には「将来は日本にまた来たい」という感想を語ってくれ、充実した滞在であったことが窺われました。

また、帰国直前に引率の先生が来校され、授業参観の中でクラスの生徒に外国語を習得する極意についてお話いただいたことも大変ありがたく思います。

４　感想と課題

本校生徒が先に１ヶ月間カナダに滞在したことは、留学生との絆を深め、渡航にも大きな安心感を与えたようです。本校の留学した生徒を中心に行動を共にするようにし、大きな問題なく１ヶ月を過ごしていました。

国際交流を積極的に行う学校として、本事業には積極的に参加していきたいと考える一方で、令和５年度の事業には、条件が叶わず、応募に至りませんでした。今後は本校生徒に積極的な参加を促し、成果を共有する体制を整えていきたいです。

最後に、募集から事後報告まで連絡調整をいただいた北海道教育委員会、アルバータ州政府教育省、相互のホストファミリーの温かい受け入れとご支援に感謝申し上げ、報告といたします。

令和４年度高校生交換留学促進事業にかかわる報告書

北海道北広島高等学校

はじめに

本校では、留学生の受け入れはこれまでほとんど実績がないが、留学に興味を持つ生徒は多く在籍している。

事前準備

本校ホスト生徒がカナダに留学した際に、本校のこと、日本の生活についても伝えてあり、メールや SNS で連絡を取り合っていたので、来日前に疑問点や不安なことは解消できた。制服を着用したいという希望があったが、本校には貸与できるものがなく、シャツとズボンを着用し、ネクタイは、本校ホスト生徒からプレゼントする形で対応した。

留学生の受け入れ

留学生の滞在期間が、約１か月間。そのうち連休もあり、実際に授業に参加できる日も限られていた。本校留学生が、カナダへの留学において、パートナーがいない授業への参加は孤独感があり大変だったことから、留学生にも希望を確認し、基本的に、本校留学生（３年生）と同じ授業に参加することとした。

３年生であるため授業の進度の関係があり、英語の授業の中でリスニング練習の補佐などを行ってもらうにとどまった。１年生の英語の授業ではカナダについての生活や文化などの紹介を英語でしたり、言語文化、家庭基礎の授業に生徒参加するなどの経験ができた。

部活動については、本人の希望を聞き、ESS の生徒との交流、茶道部、華道部への参加、本校ホスト生徒とのテニス部参加等、様々な部活動に参加して交流を深めることができた。

学校生活について（HR 担任より）

４月途中にクラスに参加したが、本人の誠実かつ社交的な性格でクラスの多くの生徒と交流することが出来た。そのことがクラス替えにより人間関係が出来ていない中で、クラスの良い人間関係作りに貢献した。事実、複数の生徒から、「留学生のおかげでクラスの雰囲気がよくなった」という発言が見られた。

また、日本人の交換留学生が所属するクラブ活動にも積極的に参加し、交流を深めていた。週末には札幌にクラスメイトと買い物や食事などに出かけ、日本の生活体験を深めていた。

課題

２年生の生徒が留学したため、受け入れ時に３年生となり、受験生の勉強時間確保という意味では負担が大きかったかと思う。また、留学と受け入れで年度をまたいでしまうため、準備がスムーズに進められなかった。特に、時間割が決まらないと留学生の時間割を確認することもできず、始業後１週間での受け入れには、準備期間が足りなかった。

課題について（HR 担任より）

日本人の交換留学生が３年生であったため、３年生の授業に参加したが受験対応などのため各教科で十分な準備・対応をすることが出来なかった。日本人の交換留学生が２年生の場合は先に外国人の留学生に２年生の内にきてもらい、その後日本人の交換留学生がカナダに行くことができれば、本校としては望ましい形だと思う。

ただし、交換留学生が短期間ではあるが校内に滞在し交流する中で、自らの英語力不足を感じて英語学習に積極的に取り組もうとする生徒や交換留学生が １ 人で日本の高校に来て溶け込もうとする姿を見て「挑戦することの大切さ」を感じた生徒も見られた。本校生徒にとっては大変良い刺激であったと思う。

おわりに

本事業に参加することは、生徒や学校が活性化する一助になった。留学生の受け入れは、受け入れ態勢が整っていない本校にとって、手探り状況ではあったが、国際交流の有意義な時間となった。交換留学に参加した生徒のみならず、多くの生徒に大変良い刺激となった。今後もこの事業を広報し、応募する生徒を募りたい。

令和４年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業研修報告書

北海道登別明日中等教育学校

(1)　生徒について気付いたこと

コロナ禍での制限が緩和されていく中で再開された本事業について、本校生徒は初めての海外渡航ということもあり、現地での交流活動に期待を寄せる一方、不安も感じていました。ただ、バディ生徒との事前のやりとりを通して、さまざまな問題が解決されていき、不安も解消されていったようです。出発が近づくにつれ生徒の表情からは不安よりも渡航を楽しみにしている様子が見られるようになっていきました。エドモントンでの生活も事前にバディ生徒とのやり取りを進めていたこともあり、早い段階で馴染むことができたようです。また、エドモントンでの留学生活を通して日本とカナダの学校の違いをはじめ、さまざまな文化的な違いに気づいていき、異文化交流にさらに興味を持つようになっていきました。渡航前は、「英語を話すこと」への不安や心配もあったようですが、バディ生徒やホストファミリーをはじめ、現地の生徒たちと積極的に話をすることを通して、不安や心配も次第に消えていきました。

また、アルバータ州の留学生を本校で受け入れた際にも、今回は自分が受け入れ留学生のバディ生徒として相手を積極的にリードしながら、積極的にコミュケーションを取る姿が見られました。その姿に周囲の生徒たちも刺激を受け、ホームルーム内で留学生と積極的にやりとりをしたり、交流をしたりする様子が見られるようになりました。

このプログラムを通して、参加する生徒たちだけでなく、受け入れる生徒たちも「言語が違っていても、同じ時期に同じ世界で暮らす者同士、理解し合うことができる」という国際理解教育のねらいが実現していく様子を目にすることができました。

(2)　受入校教員として学んだこと

国際理解教育では「外国語で何かを学ぶこと」や「自国と比較して、他国の良さや自国の良さを発見すること」が大切だと考えています。そのような点から考えると、カナダは英語を公用語とし、日本と比べより多くの文化的背景を持つ人が共に生活している国であり、日本との違いを比較しやすいと思います。

本校は生徒の英語力向上はもとより、異文化理解の視点を養う教育活動を開校当初より行っており、コロナ禍にあっても留学生の受入れを積極的に行い、本事業をはじめ、多くの留学生を受け入れてきたことで、生徒たちが英語学習や留学に大いに興味を持つようになっています。さらに、受入校として、外国人留学生の日本語指導にも力を入れています。せっかく日本に来たのですから、日本文化への理解を自身で深めてもらうためにも授業時間内で日本語学習を行っています。今ではすべての教員の協力を得ることができ、日本語学習の時間を通して言葉を学ぶことはもちろん、日本文化について学ぶ貴重な時間となっています。

今後はさらに受入れ態勢を整え、外国人留学生が北海道、そして日本に興味や関心を高め、日本と自国の架け橋になってくれることを期待しています。

(3)　本事業に係る感想

本校生徒の渡航に向けた手続き等でお世話になった教育局の方々、現地で引率団として北海道の留学生をサポートしてくださった方々、北海道からの留学生を受け入れてくださったアルバータ州の関係者の方々、その他本事業の実施に関わってくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

令和４年度（2022 年度）北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道旭川東高等学校

１　はじめに

本校は留学に興味がある生徒が多く、学校で周知したものに限らず、あらゆる機会で生徒が挑戦している。しかし、留学生の受入を行うことは久しく、本校の教育資源をもとに留学生の経験にいかに還元できるかを全校的に検討するこの期間は本校にとっても大変刺激的な期間であった。

本年度は１名の受入を行った。北海道留学生の派遣は令和４年度、アルバータ州留学生の受入は令和５年度と、年度をまたぐ事業であったが、当初の校内担当者が異動となり、引継が十分でなかったこともあり、受入体制の構築に苦慮した。とはいえ、過去の実績にとらわれず、１からシステムの構築を行うことができたため、結果としてはアルバータ州留学生のニーズに寄り添うことができたのではないかと考えている。

２　受入に際して留意したこと、苦労したこと

（１）受入前の準備にあたって

上記のとおり、年度をまたいでの実施となり、新年度が始まってから受入担当が定まった（地歴公民科の担任が担うことになった）ため、前任の英語科教員との引継が不十分なまま動き出してしまったことは反省であった。以下の（３）にも記すが、カリキュラム編成に際しては前担当者の認識、新担当者の認識、ホストファミリーの認識に相違があり、受入当初に混乱が生じた。また、同様に不安を抱えていたホストファミリーからの問い合わせも多く、対症療法的にその都度対応をしていかざるを得なかった。

（２）受入初日を迎えて

受入初日はガイダンスおよびカウンセリングから始めたが、事前に LINE 通話（テレビ電話）で話していた際と比べて、本人の調子が芳しくなく、いささか不安であった。今になって振り返ると、長時間のフライトや時差の問題、異文化に飛び込む不安や緊張が入り混じった態度だったのではないかと考える（日に日に表情は緩み、明るさを取り戻していった）。

「受入を行った他校でも問題があった」とホストファミリーから報告を受けているが、初日の通学手段については事前に対応できた部分とそうでない部分があった。駅から学校までの自転車通学許可は校内で行うことができたが、JR の通学定期の購入は登校初日に通学証明書を発行して、放課後に購入に行く、という流れであったため、初日の通学に定期を使用することができなかった。

ホームルームでは、パートナーの北海道留学生と隣になるように座席を配置したが、迎え入れ企画を行ったため、クラスメイトと速やかに打ち解けることができた。パートナーと異なる科目の授業を受ける際には他のクラスメイトも協力して案内する体制がとれていた。

（３）カリキュラム編成

まずカリキュラム編成に際しての留意点として示されていたものの引継がなされていなか

ったため、当初は英語の授業などを中心に構成した結果、ホストファミリーから確認の連絡を受けた。また、留学生本人と事前に連絡をとって、まずはホームルームの授業に一通りトライしてみたい、という要望があったので、１週目はそのように時間割を作成したが、週の途中から苦慮する科目を外すなどの配慮を行った。本人がスマートフォンで撮影すると即座に翻訳されるアプリを活用していたため、印刷物が目の前にあると対応できたようで、ご配慮いただける科目も多かったが、古典（アプリを使っても変換不能）や情報（実技指導のためテキストがなく、日本語での口頭指導のため理解不能）といった科目は早々に外すことになった。

２週目以降は本人が最も学びたい理科（生物、化学）、体を動かすことを厭わないことから体育、この期間本人が最ものめり込んだともいえる書道などを軸に据えながらも、本人がアルバータ州から数学や理科の課題を持参しており、自習の時間を確保する必要があること、日本語指導の必要性や ALT とのカウンセリングの時間を設けることなどを考慮に入れながら特別時間割を編成した。自習場所は当初会議室を使用したが、図書室の使用を望んだため、本人の要望に応える形とした。また、常駐 ALT（とはいえ他校への派遣も多く「常駐」とまではいえない）にガイダンス時のほか、定期的に Lunch Meeting を行ってもらい、カウンセリングや日本語フォローをしていただいた。

３　本事業が自校生徒にもたらした効果

留学生の滞在中、様々な企画を生徒主体で行ったり、授業や部活動（茶華道、英語、書道、陸上、野球部の応援など）に関わる中でホームルーム以外の生徒との交流も図ったりしたため、生徒や教員が英語のスキルのみならず留学生から多くの学びを得て、心に刻まれる思い出とすることができた。２学年各クラスの室長を中心に留学生が憧れていた「Japanese 運動会」を企画し、全力の運動会を１時間で体現した。また、朝から剣玉を教えたり、放課後に「椅子取りゲーム」、「フルーツバスケット」、「だるまさんがころんだ」などの遊びをしたり、昼休みや休日に留学生を囲んでのパーティを企画したりと最大限の「おもてなし」をしようと努める中で異文化交流の意義を感じ、受入に対する理解が深まったと考える。また、新年度が始まって１週間ほどで留学生がホームルームに来ることとなったため、留学生への「おもてなし」を通じて新たなクラスメイトとの強いつながりを生むことができたのも予期せぬ副産物であった。

４　終わりに

本校としても久しく経験のなかった留学生受入であったが、今回の取組を通して、受入に際しての多くのハードルを認識することができた。学校での成果や課題についてはこれまでまとめてきたが、その他に、受入にあたってのホストファミリーのご家族の方々の負担は計り知れない。留学生受入期間が大型連休を挟んだため、道内各地へ赴いたり、公民館を借りてイベントを開いたりなどしたという話を伺っているが、その多大なご協力にこの場をお借りしてお礼申し上げたい。

上記３にあるような効果が見られたため、本事業は本校および本校生徒にとって有益なものであったと考えている。今後、１名でも多く本事業に関わる生徒が現れることを祈念し、報告とさせていただきたい。

We love Lauren
Welcome
Lauren
Lauren

令和４年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業に関わる研修報告書

北海道釧路湖陵高等学校

１　交換留学概要

⑴留学生

女子生徒１名

⑵日　程

①来道期間

令和５年４月 15 日（土)～令和５年５月 13 日（土）

②本校留学期間

令和５年４月 17 日（月)～令和５年５月 12 日（金)

２　事前準備

⑴制服について

留学生より、事前に「制服を着用したい」との要望があった。ホスト生徒から情報収集を行い、卒業生の制服を借用することができた。本校留学中は、制服を着用して登校した。

⑵受入クラス

ホスト生徒は２年１組に在籍する理数科の生徒であったが、担任が外国語科の教諭である２年５組で受け入れることとした。

３　受入期間

前述のとおり、受入クラスの担任の教科と理数科の学習内容を考慮し、普通科の２年５組で留学生を受け入れた。ホスト生徒以外の多くの生徒との交流を促す効果も期待した。しかしながら、留学期間中に新型コロナウイルス感染症の感染が校内で拡大し、４月 24 日(月）の午後から２年５組が学級閉鎖となった。そのため、留学生はホスト生徒が在籍する２年１組に登校することとしたが、４月 27 日（木）から 30 日（金）までの期間、２学年が学年閉鎖の措置となった。学年閉鎖解除後は、２年５組に登校した。

外国語科教諭のクラスで受け入れたことにより、連絡事項の伝達をスムーズに行うことができた。学年閉鎖期間中は、学校としてのかかわりはできず、ホストファミリーに負担をかけたが、２年５組が学級閉鎖になった期間は、ホスト生徒のクラスで受け入れたため、結果としては、より多くの生徒と交流する機会となった。

学校生活では、特に課題は生じなかった。英語以外の授業では、周囲の生徒が留学生をサポートすることをきっかけにして交流が生じ、英語の授業では、ネイティブの存在が本校生徒に大きな影響を与えた。

４　終わりに

新型コロナウイルス感染症の影響は受けたが、留学生の受け入れに関する対応について、特に課題は生じなかった。留学生の受入は、ホスト生徒だけではなく、本校生徒の国際交流に関する意識を大きく高揚させたと考えている。

今回の事業に関わられた全ての方々にお礼を申し上げ、報告とさせて頂きます。

HOKKAIDO
BOARD OF
EDUCATION